ロヒンギャ難民に関する連続緊急シンポジウム

（2017 年 12 月 5 日・8 日開催）

報告書

聖心女子大学
グローバル共生研究所
Sacred Heart Institute for Sustainable Futures [SHISF]

ロヒンギャ難民に関する連続緊急シンポジウム
報告書

目次

報告書刊行にあたって 1

プログラム（1 日目・2 日目） 2

1 日目「ロヒンギャ問題の現状・背景を多角的に見直す」 4

2 日目「ロヒンギャの人々の今後の可能性を考える」 28

ロヒンギャ難民に関する連続緊急シンポジウム

報告書刊行に当たって

聖心女子大学グローバル共生研究所は、グローバル共生を実践する人間を生み出していくための教育と研究そして社会活動を行うために、2017 年 4 月に設立されました。その研究所がある場所は、もともと青年海外協力隊の事務所や訓練所がおかれていたので、この研究所はその血脈をいささか引き継いでいるとも言えます。

さてメディア報道によると、2017 年 8 月末から大量のロヒンギャ難民がビルマ/ミャンマーから主にバングラデシュに流出しました。バングラデシュが 1971 年に独立して以来、これは三度目のロヒンギャ難民の大量流入ですが、その規模はこれまでよりも格段に多く、問題の深刻さが伺われました。

そのため本研究所では、バングラデシュの民族問題や社会問題、あるいは日本の外国人問題などに詳しい専門家をメンバーとする「難民と避難民に関する研究プロジェクト」を立ち上げました。そしてその研究プロジェクトの活動の一環として、その時点の日本ではまだ広く語られることがほとんどなかった「ロヒンギャ難民に関する連続緊急シンポジウム」を 2017 年 12 月 5 日、8 日に 2 回催しました。

第 1 回は「ロヒンギャ問題の現状・背景を多角的に見直す」、第 2 回は「ロヒンギャの人々の今後の可能性を考える」をテーマに設定しました。非常に多くのご関心をお寄せいただき、連日 250 名を超える方々にご参加いただきました。

パネリストからは、ロヒンギャ難民における単純化できない、複雑な問題の構造の存在が明確に示されました。ビルマ/ミャンマーの歴史や複雑な政治社会構造にも、さらに目を向けていく必要があります。このように多角的に問題を捉える必要性を、私自身もこれらのプロセスを通じて痛感した次第です。またより多くの皆さまにこれらの会で語られた貴重な内容をシェアするために、本報告書をまとめました。

このロヒンギャ難民がこれまでの二回のように、無事帰国できることが一番の解決です。しかし残念ながら、今回ばかりはその解決には長期の時間を要しそうですし、別な方途も考える必要がありそうです。そのためにも、一人でも多くの方にこの問題への理解を深めていただきたいと願っています。

本研究所では、定期的に公開・非公開の研究会を開催し、ミャンマー側からロヒンギャ問題を見る、バングラデシュにおける最新の支援状況を知る、在日ロヒンギャ難民の声を聞くなどを通じて、問題の原因をより深く探り、また幾つかの解決策を探って行きます。

2018 年 9 月からは、本研究所の 1 階展示スペース「Be＊hive」において、「アジア・アフリカの難民」を取り上げます。アジアの難民として、ロヒンギャ難民を取り上げます。ぜひ、展示スペースにも足をお運びいただければ幸いです。

聖心女子大学グローバル共生研究所
所長　大橋　正明

聖心女子大学グローバル共生研究所

ロヒンギャ難民　緊急連続シンポジウム
第 1 回「ロヒンギャ問題の現状・背景を多角的に見直す」

日時：2017 年 12 月 5 日（火）１８：３０～２０：３０
会場：聖心女子大学ブリット記念ホール
主催：聖心女子大学グローバル共生研究所

プログラム

（敬称略）

18:30～18:40開会挨拶、ロヒンギャ問題の背景説明

聖心女子大学　グローバル共生研究所長
聖心女子大学　文学部人間関係学科教授
大橋正明

＜報告＞

18:40～18:55「ビルマ(ミャンマー)・仏教徒の視点からみたロヒンギャの人々」

弁護士
渡邉彰悟

18:55～19:10「バングラデシュの現状～難民及びジュマの人々の現状と問題」

聖心女子大学グローバル共生研究所客員研究員
静岡文化芸術大学教授
下澤嶽

19:10～19:25「現場の生活状況と赤十字による人道支援の状況」

日本赤十字社国際部参事
斎藤之弥

19:25～19:40「ロヒンギャ問題を巡る地政学：ARSA を含めて」

聖心女子大学グローバル共生研究所客員研究員
東京外国語大学講師
日下部尚徳

19:40～19:50　　～10 分間休憩～

19:50～20:10シンポジウム

モデレーター：(特活)シャプラニール事務局次長　藤﨑　文子

20:10～20:25質疑応答

20:25～20:30閉会挨拶

大橋正明

聖心女子大学グローバル共生研究所

ロヒンギャ難民　緊急連続シンポジウム
第２回「ロヒンギャの人々の今後の可能性を考える」

日時：2017 年 12 月 8 日（金）１８：３０～２０：３０
会場：聖心女子大学ブリット記念ホール
主催：聖心女子大学グローバル共生研究所

プログラム

（敬称略）

司会：下澤嶽（聖心女子大学グローバル共生研究所客員研究員、静岡文化芸術大学教授）

18:30～18:40開会挨拶、第 1 回シンポジウム要旨

聖心女子大学グローバル共生研究所客員研究員
静岡文化芸術大学教授
下澤嶽

＜報告＞

18:40～19:00「ロヒンギャ危機における今後のビジョン」

UNHCR 駐日事務所代表
ダーク・ヘベカー

19:00～19:15「バングラデシュでの定住の可能性と課題：ビハール難民の事例から」

聖心女子大学　グローバル共生研究所長
聖心女子大学　文学部人間関係学科教授
大橋正明

19:15～19:30「無国籍という問題」

聖心女子大学グローバル共生研究所客員研究員
早稲田大学大学院博士課程在籍
加藤丈太郎

19:30～19:45「ロヒンギャ問題をビルマ(ミャンマー)側から見ると～排他的ナショナリズムの構造と実態」

上智大学総合グローバル学部教授
根本敬

19:45～19:50　　～５分間休憩～

19:50～20:10シンポジウム

モデレーター：(特活)シャプラニール事務局次長　藤﨑文子

20:10～20:25質疑応答

20:25～20:30閉会挨拶

大橋正明

第１回「ロヒンギャ問題の現状・背景を多角的に見直す」

大橋正明　**開会挨拶、「ロヒンギャ問題の背景説明」**

今日は多くの方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。今回の主催は、聖心女子大学グローバル共生研究所ですが、特にその研究所の「難民と避難民に関する研究プロジェクト」が、今日のイベントの内容を企画いたしました。それを代表しまして、皆さんにお集まりいただいたことを心より感謝申し上げます。

この会場を使い始めてから、こんなに人数が集まったのはおそらく初めてと思っておりまして、大変喜んでおります。大体 250 名の方からお申し込みいただきました。半数近くが学生の方でありました。次に多いのが NGO 関係者、援助関係者、宗教団体といった方々でした。残りの 4 分の 1 ぐらいが、その他の方々と思っております。そんな感じで今日は、皆さんがお集まりいただきました。

それから、今日は素晴らしいゲストスピーカーの方々をお招きすることができました。今日講演いただく方々は、講演冒頭で私から名前だけをお呼びしますので、紹介はご本人にしていただきます。ですので、特に詳しくこちらのほうからご紹介申し上げることはございません。

それでは、開会のごあいさつはこのぐらいにして、ここからは少しロヒンギャの人々のことをお話しします。研究所の所長を務める私は、バングラのことは勉強していますが、ミャンマーのことはあまり勉強していませんでした。ただ、ロヒンギャの難民は 1991 年末、バングラデシュで、私が国際赤十字を代表代行としてその対応に当たりましたので、私が知っている限りのことと、改めて今回勉強したことを、これから少し皆さんにシェアをしておきたいと思います。

まず、「ラカイン」とか「アラカン」と、どっちの名前も使われるのですが、ラカインの民族が暮らしている今ではビルマでのラカイン州の場所には、非常に古くからいろんなラカイン人の王朝が立ち、それらを保持していました。地図でラカインの様子を見ると、海を除いた各方面が山に囲まれていますので、非常にビルマ方面の他地域との関係が薄いというか、言い換えると独立性がある。それらと比較すると、ベンガル湾と北に隣接するベンガル地方に開かれているということがお分かりになるかと思います。現在のインドやバングラデシュとも、非常に活発な交流、行き来が盛んにあったということは歴史の様々なところにいろんなふうに書かれています。しかも、再度ラカインの地図を見ていただくと、明らかにラカインの人たちが、今のバングラデシュのチッタゴン地域のほうまで支配していた時代もあったということが示されています。歴史的にこの辺の地域は、お互いにいろいろ行き来をしていた、と認識していいのだろうと思います。

開会挨拶に代えて：ラカインの略史

- ラカイン(アラカン)民族は、古くから1785年頃まで様々な王朝のラカイン王国。現在のインドやバングラデシュとの間で交流や行き来。一時期、王国はBDのチッタゴン地域も支配。
- 1785年からビルマのコンバウン朝による支配。その後英緬戦争の結果、この地区は1826年～1937年英領インドになり、インド人/ベンガル人は盛んに往来・居住。例えば1925~27年、S.C.ボースはマンダレー刑務所に在監。
- 1937年に英領ビルマに。しかし42年からの日本軍占領とビルマ独立軍（BIA)の支配はインド系イスラム教徒を圧迫。
- 1948年ビルマ連邦のラカイン管区→自治権拡大でラカイン州(関東より一回り大)に。しかしその後も、ラカイン民族の分離独立要求などの排他的な組織の活動継続。
- 969運動やPatriotic Association of Myanmar（マバタ）などミャンマーの仏教組織が過激な反イスラームの呼び掛け。

さてこのラカイン民族の諸王国は長い間、栄華を誇っていました。それが暗転したのは 1984 年か 85 年と言われるときで、ビルマの人たちの王朝によってここが征服・支配をされます。その後に、そのビルマとイギリスが戦争になってビルマが敗北し、その結果この地域がイギリス領に割譲されます。つまり、英領インドの一部になっていたわけです。ですから、英領インド、特に今のインドの西ベンガル州やバングラデシュにいた人たちにとっては、「あっ、これは俺たちの地域の一つだ。支援された植民地の一つのユニットなのだ」という意識が当然働きました。さらにイギリス人はご存じのとおり、いろんな人々を意識的に移動させます。例えば、バングラデシュであれば掃除をする人たちを別の地域から連れてきた。ですから当然、このラカインの地域にも、人工的に人を動かした可能性はあるだろうと思っています。

また当時の人の流れの別な例ですが、第二次世界大戦時のインド国民軍というのがありました。インドの武力での独立を目指して、日本軍とインパール作戦を一緒に戦ったのが、その大将のスバ

ス・チャンドラ・ボースです。その人も、その前の時代にミャンマーのマンダレーの刑務所に投獄されていました。その頃、ビルマ全体が英領ビルマになるのですが、いずれにせよ英領インドと英領ビルマというというのは非常に近い関係にあった。

1937 年に英領インドから分かれて英領ビルマになり、そして 42 年から日本軍がビルマを占領しました。それと共に当初は日本軍と共闘していたビルマ独立軍は、多くのイスラム教徒の人たちはイギリスに通じているのではないかという疑いをもって圧迫をかけたと言われています。

またビルマ独立後にラカイン管区となったのですが、それで自治権運動があったものですからラカイン州という形で、管区より一回り大きいぐらい範囲に、自治権を与えています。しかしラカインの人たちはそれで満足したわけではなく、その後もラカイン民族のビルマからの分離運動が続いているということが今回の背景にあるということです。

これをロヒンギャのほうから見てみますと、少なくともバングラデシュがパキスタンとしてとして独立した 1947 年の時点から 1961 年までの間で、このラカインの地域で「ムジャヒディン」を名乗る武装勢力が、ラカインを東パキスタンに編入したいと思ったのか別な国をつくりたいと思ったかは分かりませんけれども、働いたという記録が残っていて、これがラカインやビルマの人々のかなり悪い記憶にも結びついている、と理解をしています。しかし、一方で平和的に共存していたロヒンギャ人もラカイン側にいました。ガッファという人が典型的なのですが、彼は 1947 年以来、2 回か 3 回ラカインの地域から選出された国会議員で、日本でいう大臣政務官みたいなポジションにまで上り詰めています。また数人のロヒンギャ人が国会議員になった、という記録も残っています。ですから、ある意味での共存、多民族性が保たれていたときがあった。

ただ、1977 年、78 年に「ドラゴン作戦（operation dragon）」で、初めてロヒンギャ人約 20 万人弱の難民がバングラデシュに来ました。この難民は、2 国間合意を経て、国籍カードを持っていることを条件に本国帰還がなされました。その後の 1982 年に国籍法が制定されて、ロヒンギャの人々の国籍が奪われ、国内の移動の制限も始まっていきました。

1991、92 年で「pia Taych 作戦」というので二度目のロヒンギャ難民が 25 万人出ました。忘れもしません、1991 年の 12 月 24 日か 25 日、私は国際赤十字と日本赤十字の代表で現地に入れた唯一の外国人だったのですが、難民支援の経験もそんなになく、非常に緊張してこの後の数週間仕事をしたのをよく覚えております。しかしこれも結局、1992 年の 2 国間の合意で、国籍ではなくて、住民であることを確認するという条件で帰還を始めました。しかし結局数万人は帰国をせず、あるいはしたくなかったということになっています。数万人のラカインの人たちがバングラデシュに残りました。

ところで、2012 年にラカイン州の北部でムスリムのロヒンギャの人と仏教徒の間で衝突があって、数百人を超える犠牲者が出て、それは主にムスリムの人たちでした。これが全国に広がって、ビルマの大都市であるマンダレーやヤンゴンでも衝突し、犠牲者の多くがやっぱりムスリムでした。その際には、かなりの数の国内避難民が出たという記録があります。そのことを受けて、おそらくこの後から 2015 年ぐらいまでロヒンギャ人がボートピープルになって、たくさん東南アジアの方向へ流れていったという報道を記憶している方も多いかと思います。しかし、行った先が必ずしも難民条約の加盟国でなかったり、そこで従った扱いをせずに、海に無理やり押し戻したというようなことで、国際的な非難を浴びたり、あるいはロヒンギャ人が人身売買の犠牲者になって密林に連れて行かれたというような事件になりました。

それから、これは後で日下部さんが述べられると思いますけれども、2016 年の 10 月にロヒンギャ人のグループが警察の駐在所 3 カ所を襲撃して、ミャンマー側の死亡者が 3 名出て、これからぞろぞろ、ぞろぞろと出るようになっていました。それで私たちは、どうしようか、というふうに思っていたところがあります。ところが、2017 年の 8 月 25 日にもっと大きな同様な事件が起きて、それ以来難民が大量に出るという大変

写真：The Daily Star紙

な状態になっていったというのが、これまでの大きな流れです。ご存じのとおり、こういう形で逃げてきています。これがキャンプの状態です。この前、ローマ法王が行かれましたので、ロヒンギャの人たちとお祈りをしているというような写真が出てきています。これは金曜日に私がしゃべる予定ですけれども、バングラデシュに逃れてきたロヒンギャはたぶん現在の時点で約 63 万人で、今後も入ってくると思いますが、もうあまりミャンマーには残っていないだろうというふうには予想されています。以前から 20 万人前後の人がいたのと、それから非登録の人たちというのが必ずいますので、下手すると 100 万人近い事態になっています。

日下部さんが報告される ARSA による襲撃の直前に、アナン元事務総長が報告書を出しています。またミャンマー政府は、2017 年 11 月 23 日にバングラデシュ政府と合意して、1992 年の帰還条件に従って難民の帰国をするということになりましたが、2 カ月以内に開始ですが、いつかは分かっていませんし、国籍を持つ帰還者というのは、一応ニュースによるとロヒンギャで国籍を持っている人は 4,000 人で、帰還申請をしている人は 1 万人という報道が出ていますので、下手したら 1 万 4,000 人しか帰れないし、1 日に帰るのが 150 人とか 200 人というふうに言われているので、何年もかかることになるんじゃないか。そういうことで、バングラデシュ側は強い不信感を持っている。だから国際プレッシャーが必要だと。

しかし、国際的にはいくつかの大国がそれぞれの裏に付いていますので、これについても後で日下部さんのほうがおっしゃると思いますけれども、例えば国連での認定とかプレッシャーをかけることが非常に難しい状態になっている。ただ、アメリカは「民族浄化」ということを 11 月 22 日にはっきりと言っていますので、これが国連の安全保障理事会なんかにすると国際司法裁判所のほうのマターになっていくということですけれども、そこの手続には至っていない状態にあります。

ちなみに、80 年前後のインドシナ難民が 144 万人と言われています。それに比べると今回も同程度の規模になっているのに、日本の関心が低いし、日本政府の対応も少ないかなというふうに私は感じております。そういう意味で、皆さんの関心を高めていく、そうでないともっと人々のリスクは多くなるんじゃないか、というのが今回の一番の目的です。以上です。

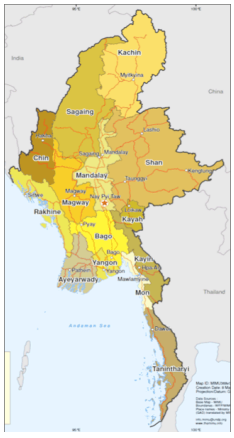
それでは最初の報告者に移りたいと思います。渡邉先生、よろしくお願いいたします。

渡邉彰悟 **「ビルマ(ミャンマー)・仏教徒の視点からみたロヒンギャの人々」**

皆さん、こんばんは。弁護士の渡邉といいます。よろしくお願いします。

私は、ビルマ人の難民申請のお手伝いをずっとやってきたという経緯がありまして、その中で、ビルマ側からこの問題を捉えて、今日は、今の被害の状態というよりも、この問題がどういう構造的な背景があるのかということを、お話をしたいと思っています。

ミャンマーの民族分布は、70%を占めるビルマ族のほか、シャン族、カレン族、ラカイン族、モン族、チン族、カチン族などがいまして、これらが大きな民族で、それぞれに州を持っています。一応ミャンマー政府は 135 の民族がいるというふうに言っていますけれども、もちろんその中にはロヒンギャは入っていないわけです。



これは簡単に見ておいていただきたいのですが、北側にあるのがカチン州です。後で出てきますので覚えておいてください。それと、シャン州。シャン州は非常に大きいです。それと、ヤンゴンがこのあたりで、今のネピドーは、首都はここのど真ん中です。ラカインは、西側です。バングラデシュがこちらにあって、ここはインド、ここが中国、タイ、こういう周辺国です。

宗教分布は、仏教が 90%近くで、ビルマ族、モン族、アラカン州のアラカンの人たちは仏教です。キリスト教徒も、カレン、カチン、チン、カレンニー、もちろん例えばカチンの人が 100%キリスト教というわけではないですけれども、多くのカチンの人たちがキリスト教という意味です。そして、イスラムが 3.9%、ヒンドゥーが 0.5%などです。上座仏教なのですが、こういった分布があるというふうに言われています。

構造的な話をなるべくさせていただきたいわけですけれども、やはり流れが

分からないとその構造的な問題はちょっと理解が及ばないので、全体的なお話をします。

1948 年に独立をしてから、その後、共和制が敷かれていたわけですけれども、62 年にネ・ウィンが軍事クーデターを起こして、そこからビルマ社会主義計画党（Burma Socialist Programme Party＝BSPP）というものを結成して、とはいっても、ここはほとんど軍政だったというふうに評価しているのですが、62 年から 2011 年までずっと軍政が続いていたというふうに見ることができると思います。その中で、後でまた言いますけれども、1982 年に新国籍法というものを BSPP のもとで制定をしています。

1988 年にアウンサンスーチーさんも出てきて民主化を求める大衆運動が高揚したということがありました。1990 年に総選挙がいったん行われているんですね。その総選挙で NLD が大勝をしたのですが、軍は、その総選挙の結果を無視し、政権を移譲しないままに軍政が続いたということがあります。そして、2007 年の夏の反政府デモ。お坊さんたちがずっと街を練り歩いて、それを市民が支えるというような反政府デモがありました。

2008 年 5 月に、結局、その 90 年の総選挙を無視する形で軍政側が新憲法法案というものを作って国民投票を実施します。今もこの憲法が生きているわけですけれども、その当時は非常に批判されていた憲法ですし、この国民投票そのものも、適正な手続だったのかという問題はあります。2010 年の 11 月にこの新憲法に基づく総選挙が実施されて、最初は、NLD は参加していないのですが、一応民政化されると言われています。そして、2015 年の 11 月、二度目の総選挙が実施されて、ここで NLD が圧勝するわけです。

2007年いわゆるサフラン革命
9月27日は長井健司氏射殺

これが 2007 年のいわゆる「サフラン革命」と言われるもので、9 月 27 日に長井健司さんが殺されたことは皆さんご記憶のことと思います。

国籍法に戻りますけれども、82 年の国籍法なのですが、国民を 3 つに分類して、政府直轄の中央機関なるものを設置して、これが国籍問題を処理するという形でした。国民は、ここにあるような人たちなのですが、1823 年以前から領土内に定住していた少数民族というようなことで、これの立証はとても困難ですので、これによって事実上、ロヒンギャの人たちは排除されていったということになります。

国籍法の取り扱い

- 1982 年　新国籍法が発効した。
- 国民を 3 種に分別し，政府直轄の「 中央機関」なるものを設置し、これが幅広い権限をもって個々の国籍問題を処理することになった。
- 「 国民」（ full citizenship）の資格は「 カチン、カヤー、カレン、チン、バマー、モン、ラカイン、シャンなどの諸民族および1823 年以前から領土内に定住していた少数民族」に認められている（ 第3 節）。

他方、先ほどの 2008 年に制定された現行憲法はどういう内容かというと、国軍の非常事態権限を認めるとか、さまざまな形で超越的な存在として存在しているということがいえます。それと、議会が二院制なのですが、両院とも 25%の議席は国防大臣が指名する軍人だということで、既に 25%は軍人だというふうに決まっているんです。他方、憲法改正は両院の 75%以上の賛成が必要だというので、憲法改正はもう絶対に不可能だというのが今のこのビルマの状態です。

かつ、4 番ですけれども、大統領と副大統領 2 人は議員から互選されるのですが、うち 1 名は国軍関係者でなければいけないということと、国防大臣、内務大臣、国境担当大臣、非常に主要な省庁がすべて軍によって掌握されているというような状況があります。ですから、今、NLD 政権というふうに、スーチーさんたちが政権を握っているわけなんですが、実際には国軍が同時に権力を握っているという二重構造の状況が分かるかと思います。

現行憲法の問題点

- 1．国軍がビルマにおいて超越的存在
- 2．議会は2 院制を採用
  - しかし，両院とも25%の議席は国防大臣が指名する軍人
- 3．憲法改正には両院の75%以上の賛成と、有権者の過半数の賛成が必要⇒ 改正はほぼ不可能
- 4．大統領と副大統領2 人（ 計3人）は議員から互選。うち1名は国軍関係者でなければならない。また、国防大臣、内務大臣、国境担当大臣については、大統領ではなく国軍最高司令官が任命～中枢的省庁は軍が掌握

ロヒンギャの流出したことは今回が初めてではなく

て、78 年にもドラゴン作戦というものがありました。そして、91 年から 92 年に 25 万人の人たちが流出するということがありました。これは、なぜこのときにこういったことが起きたかというと、90 年の総選挙で NLD が圧勝するわけですけれども、ロヒンギャの人たちが NLD を推したというようなことがあって、それに対する報復ではないかとも言われています。

93 年 11 月から UNHCR も関与して帰還が始まるわけなのですが、かといって、元に戻っても国民として認められるわけではないので、ここの帰還も非常に不十分だという問題があります。

先ほど 2012 年にも反ロヒンギャ暴動があったという話がありました。これもちょっとしたきっかけでした。2016 年 5 月には、もともと，アンダマン海を船で南下してタイに接岸して上陸し、陸路でマレーシアに流れていくという人身取引のルートがあるのですが、そこがタイ当局による人身取引の規制が始まったことによって流れが止まってしまったために海上で漂流する人たちが顕在化したという問題がありました。

とにかく、ロヒンギャに対する抑圧、そしてそのことを背景とする流浪という問題は非常に長い間続いています。

そのこと自体の要因として、ロヒンギャの人たちはビルマにおいて圧倒的な差別を受けているということです。その差別はさまざまな差別があるわけですけれども、それが前提にあります。

今は、仏教による反ムスリム運動は確かに存在はしています。「969 運動」というのがありまして、仏陀の九徳と仏法の六徳、僧九徳ということで、イスラムのお店には「786」というのがあるらしくて、これはコーランにちなんでいるらしいのですが、そういったものに対抗するようなものとして「969 運動」というものが出てきているようです。

それと、最近、マバタという仏教ナショナリズムといわれる団体の高揚という問題があるのですが、マバタが、すべて仏教至上主義で仏教原理主義的なものかというのは、そこはちょっと分析が必要なのですが、しかし、そういう動きが強くなっていることは事実だと思います。それは、ムスリム人口の増加抑制とか仏教徒の防衛とかいうことで言われているところでもあります。ただ、マバタ全体がそのような方向一色ということでもないようで、いろいろな批判も存在はしています。

ビルマの問題を考えるときに必要な視点というのが 2 つありまして、1 つは「民主化」という問題です。もう 1 つ少数民族の問題です。この 2 つが必ずビルマの問題を分析するときに必要なわけですけれども、もちろんロヒンギャ問題というのは、この少数民族に関わる問題でもあります。少数民族は、先ほどカチン、チン、シャン、カレン等さまざまな少数民族があったわけですけれども、その少数民族と中央政府の戦いというのはものすごく長い歴史があります。カレンと国軍との紛争の期間というのは世界でも最も長いと言われているぐらいの紛争です。

シャン、カレン、カチンなどへの大規模な攻撃が継続しています。その中で大量の国内避難民も存在しています。現在，少数民族との「21 世紀パンロン会議」というのがありまして、和解をしようとしているのですが、それもうまく進捗していない。

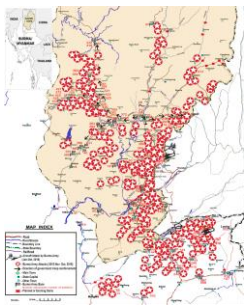
これは、「KWAT」というカチンの女性団体がまとめた、カチン州における 2015 年から 2016 年における爆撃の図です。これだけの爆撃が行われている。実は、ロヒンギャのことが非常に国際的に流れていながら、このカチンの問題はなかなか流れません。しかし，私は、ロヒンギャの問題とともにカチンにおいても非常に大きな人権侵害の状況が起きていると思っています。

先ほど 2015 年 11 月に総選挙が行われたという話がありましたけれども、実は、2015 年 11 月のこの時期にカチンの爆撃が続いているんです。いまだに続いているのですが、要するに、民主化の動きとは全く関係なく、国軍はこういったことを行っているということ

•KWATレポート

「A FAR CRY FROM PEACE」より

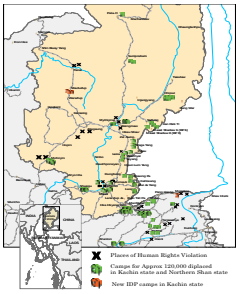
ビルマ国軍のカチン攻撃
2015年11月～2016年10月



2015年11月～2016年10月

IDPキャンプ

人権侵害



が分かるわけです。これは、カチン州における IDP キャンプ（国内避難民キャンプ）です（前頁図を参照)。

私が特に申し上げたいのは、ロヒンギャというのは、軍にとってとても都合のいい存在だということです。ありがたい存在。少数民族と国軍は常に戦っています。ビルマ軍は、少数民族をいかに抑圧し支配するかということに腐心をしているわけです。その腐心をしている対象である少数民族の意識がロヒンギャに向けば向くほど助かるわけです。少数民族とロヒンギャは、特に、アラカン州におけるアラカン民族は勇猛果敢な民族だと言われていますけれども、その人たちの意識をロヒンギャに向けさせる。国軍がロヒンギャを追い出すことは、「あなた方はよくやっている」という話になってくるわけです。国軍は常に権力を掌握する装置を作ろうとしている。その中にロヒンギャが位置付けられているというふうに思います。ここには差別の二重構造があるのですが，残念ながら、ビルマ族も、他の少数民族においても、そのことが十分に意識化されていないと感じています。

先ほどコフィ・アナンさんの報告があったように、今年の 8 月 24 日に調査報告をしてロヒンギャに国籍を認めることなどの 88 項目を勧告しました。その翌日から今回の国軍によるロヒンギャの鎮圧行動が始まっているわけです。ロヒンギャの武装勢力がいたか、いなかったかというのは、私にははっきり分からないのですが、いま進行している事態は，そういう勢力が存在していたかどうかというレベルを超えています。そういう問題ではないというふうに私は思います。今回の事態によって NLD 政権の限界をあらわにすることができるし、スーチーさんや NLD への期待を喪失させることもできるし、軍の必要性、不可欠性を国民の意識の中に堅持することもできるわけです。

軍は、時に権力の誇示もあからさまにします。例えばシャン州北部やカチン州での攻撃は端的なものですし、ウー・コーニー氏という NLD の法律顧問の弁護士が 2017 年 1 月 29 日に白昼堂々ヤンゴン空港で殺されるのですが、この人が殺されるという事態にもよく現れていいます。

結局、ビルマ国軍が自分たちの正当性を誇示し、その存在意義を国民に知らしめるためにロヒンギャは軍にとってなくてはならない“装置”だということです。少数民族との紛争を覆い隠して、少数民族の NLD への期待も削いでいるということで、まさに軍が思い描くストーリーの中にロヒンギャが使われ、仏教が使われているという構造だと理解をしています。

私の報告は、以上です。

大橋

どうもありがとうございました。それでは続いて、下澤さん、よろしくお願いします。

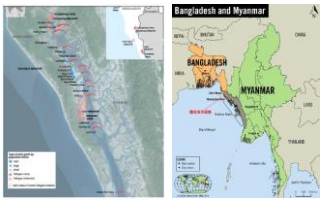
下澤嶽 **「バングラデシュの現状～難民及びジュマの人々の現状と問題」**

どうも初めまして、「ジュマ・ネット」という NGO を主宰している共同代表の下澤です。また、こちらのほうでは客員研究員としてお世話になっております。ということで、今日の肩書としては、主にジュマ・ネットでやったことをお話しさせていただくことになっています。よろしくお願いいたします。

ジュマ・ネットは、もともと国境沿いのバングラデシュ側のマイノリティーである仏教徒の弾圧や民族抑圧的な政策に対して何か物を言っていこうということで、今から 16 年前につくった小さな団体です。今回、このロヒンギャ難民への支援に携わることになりました。それで、図らずも流入がピークのときに現場に入ることができて、そのときにいろいろ感じた雑感やその後の動向について少し述べさせていただきます。

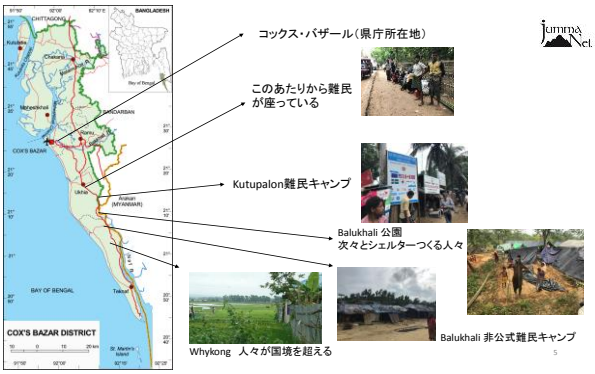
91 年の流入のときに大橋さんも当時、現場にいましたが、私はシャプラニールの駐在員としてバングラにおりました。そのときも一部シャプラニールとしてロヒンギャ難民のキャンプの支援活動を行いました。また、ロヒンギャ難民に関わるとは思っていなかったのですが、2015 年ぐらいのボートによる流出のときからずっと気になっていたんです。何が気になっていたかというと、日本の NGO がほとんど動いていない、声も上げていないというあたりに非常に焦りのようなものを感じていて、そして、8 月 25 日の前の 2016 年 10 月 7 日の最初の襲撃後の流出以降、ジュマ・ネットとしては本格的に何かをしようと動き始めました。そのフォローアップに行ったのが、この 9 月 9 日。

流出を聞いて入ったのではなくて、10 月の事件のフォローアップを考えながら何ができるかを見つけるために入りました。結果的にこの大流入とかち合ってしまったということです。



いろんなルートでミャンマー側から難民たちが入ってきていました。陸路は、このあたりが一番多かったと言われています。ボート、また、海岸沿いに上がってくるケースもあり、ボートの場合はよく遭難、舟が転覆、または陸地から射撃を受けて死ぬというようなケースも含まれていました。

ここが県庁がある市街地のコックスバザールですが、そこから南に下りていくとテクナフ半島の先端まで行きます。一番難民が集中していたのは、ウキアからイエックナイにかけてのこの一帯でした。ここまで陸路を水に浸かりながら渡ってくるケースが多かったように聞いています。今回、私は、このコックスバザールからオート三輪で途中まで行って、あとはずっとここまで歩いて、つぶさに様子を見てきました。



コックスバザールは観光地でもあり、高級ホテルも並ぶ県庁所在地ですけれども、1 時間ほどでウキア・ウポジラに少し入ると、すぐこういう形で難民たちが路上に座り込んでいる。様子を見ると、荷物を抱えていて座り込んでいて、じっと人を見ていて、時折、車が止まって窓を開けて、バッと物を投げると、わあっと群がるような状態が続いていました。座る人々の数は進むほどどんどん列をなして増えていくという状態で、次第に渋滞するというんですか、車もバスも人もあまりにも多くて歩けない感じでした。これ（図中央）が、92 年以降に造られたクトゥパロンの正式な難民キャンプで、過去に登録を済ませた人はここにいます。今回の難民は、もちろんここでは恩恵を受けていません。路上や空き地に自ら造ったキャンプ地に家を勝手に建てていました。特にバルカイ公園とクトゥパロンのあたりに密集していまして、国有地を適当に選んで、ビニールと竹で臨時のシェルターを造っていました。この当時は WFP や IOM など、既に入っている国際機関を除くと、緊急支援がほとんど入っておらず、政府もほとんど手を出していないという実態がありました。ここ（図右下）が私たちの活動が後々展開するバルカイの非公式難民キャンプで、親族がいない人は路上に座る、またはこういうふうに新しく家を建て始めますが、親族と携帯電話で連絡を取り合っていて、既存の非公式キャンプの親族を頼って暮らしている人にも多く会いました。ここが、ワイロン（図左）という難民が歩いて入ってくるポイントのひとつで、ここからも難民が入ってくるのが見えました。

ちょっと写真（下の左）を見ていただきます。こんな感じで路傍に座っていて、物乞いをする人もいれば、物資を投げる者に群がるような状態が続いていました。善意とはいえ、こういう配布の仕方は極めて危険な状態、この人も怒鳴る、棒で殴るとかしています（写真右）。無秩序に路上で配られるので、若い力のある人が駆け寄って他の人を押し退けるということで、力のある人だけに物が渡るという不均衡な状態が続いていました。バングラデシュ政府はこうした状況を管理しようという意識がこの当時はほとんど見られなかったと思います。

特に、長い避難の旅の果て、こういう疲れ切った子供をよく見ました（写真左）。乳幼児のこの疲弊は、目に見えて分かるものが多かった。この子は逃亡中に生まれた子でおそらくほぼ数日中に死

突発的に配給が始まる。
混乱する配給現場

ぬだろうという様子が見て取れました。

乳幼児の衰弱がひどい

右は先ほどの写真ですね。この被害者のインタビューを幾つか行いましたが、この人はもう何も手に持ってなくて、この水だけしか持っていなかったですね。荷物を持てなかった実態があったのだろうと思います。簡単なシェルターの材料である竹やビニールを、その当時は難民は自費で買って、造っていた。値段も聞きましたけれども、そこそこの値段でした。何らかの形で現金を手に入れて自力でシェルター造っていました。正式な登録キャンプは以前のもの 2 つに、その当時は適当にあちこちに造られたキャンプが何百と点在するという状態かと思います。

当時は、バングラデシュ政府側は支援に関しては非常に慎重、やはり 10 月の事件以降、動きが極めて弱かったと思います。IOM という UNHCR ではない団体に調整全体を任せていて、あまり積極的に食糧支援を行う様子は見られませんでした。当時、国境なき医師団やユニセフ、IOM、WFP の団体等のサインボードを幾つか見つけましたので、活動が入っているという実態はありますが、私の 92 年の支援活動の体験からすると極めて少ない。これは明らかにバングラデシュ側が援助を促進しないという意図的な姿勢が、強くあったからだと理解します。

9 月の中旬あたりから支援活動が活気づくというか、バングラデシュ政府の姿勢が変化していくのが見えるようになっていきます。これは、ハシナ首相がキャンプ地に訪れた後から明確に国際社会のいろんな動きが活性化していきます。日本の赤十字社もこのころ最初の調査に入っていると聞いています。

あと、クトゥパロンに正式な収容地域を指定するというような話も出てきて、政府の支援活動が活発になったのは 10 月ぐらい。明らかにバングラデシュのこの遅い対応には意図があったというのが私の理解です。そして今、バングラデシュ政府はノアカリのブハシャンチャー島へ 10 万人の移住計画も発表しましたが、果たして現実的かどうかという懸念の声も多いです。10 万人としても 60 万人から考える一部でしかないという点から考えると、現在のクトゥパロンが重要な難民キャンプの拠点、ここをどうするかという視点はもう崩せないだろうと思います。

2016年10月9日事件以後の支援

2016年11月下旬	難民流入が各メディアで連日報道される。
2016年12月下旬	難民数5万へ。マレーシアのNGO現地で支援予定。 バングラデシュ側、IOMが中心に支援調整。
2017年1月	マレーシア政府、2億6千万円、支援決定。
2017年4月	難民数7万へ。3月、4月、5月、ジュマ・ネット食料支援を実施。 無人島へキャンプ地移動の計画が。
2017年8月25日	ARSA30か所を再び襲撃。新たな難民流入へ。
2017年9月上旬	難民数12万を超える。ARSA停戦宣言。

これが 2016 年 10 月。私たちは 10 月からすでに支援の可能性を探っていたわけですが、一向に現地の NGO にバングラデシュ政府からの許可が出ない。IOM に連絡してみてもなかなか要領を得ないと。お金を送ろうと思っても、どこに送っていいか分からないみたいな状態がしばらく続いていました。最終的に政府から許可をとりつけた現地の NGO とコンタクトを取ることができ、3 月、4 月、5 月と計 3 回の食料支援を行うことができました。このころはまだ難民が 7 万程度で、日本の関心もそれほど高くはありませんでした。ハシナ首相が難民キャンプを訪問したのが 2017 年 9 月 12 日、私の 3 日後に入ったわけです。その後、目に見えるような形でいろんな援助が入っていきます。日本政府が 9 月下旬には 4 億円のコミットメントを出し、国連が 10 月下旬に出した各国の共同支援の 380 億円になります。日本政府は、その後さらに支援を 10 億円追加ということで、かなり支援活動の道筋が見えてくるのが 10 月に入ってからでした。

バングラデシュ政府の対応の遅さをどういうふうに読み取れるかというと、できるだけ緊急支援

を控えて難民の流入の量をコントロールしたいという意図がまずあったのではないか。

もう一つは、帰還難民交渉をまず最優先させたいということで、ミャンマー側を刺激させない、つまり人権侵害が起きているとか、または、テロ行為を行ったグループがバングラデシュ側の加担によってできているんではないかという、極力そういう雑音は出したくなかった。しかし、バングラデシュ側は常に国内側のイスラム系団体が、「ロヒンギャを何でやらないんだ。何かしろ」という圧力をかけてきていたので、ポーズ的にいろんな発言をするということを繰り返し、実態としては支援活動をぎりぎりまでコントロールするという政策だったと。テログループの温床にならないようなキャンプをどうするかということで、最初、移設案が出たのも、おそらくそこに恣意があったのではないかと思います。そして、国際世論が高まった一番瀬戸際のところで、ここからだということがハシナ首相の難民キャンプ訪問がなされたというふうに理解しています。

ジュマ・ネットは、ささやかですけれども、こういうふうに 6 回に分けて、2016 年 10 月と 2017 年 8 月の襲撃事件後、支援活動をしました。ジュマ・ネット自体は団体力としては力がありませんので、大手 NGO にぜひ出てきてほしいということをよく声掛けをしました。

10 月の最後の配布のときは、軍がもう既に入って、配布量の調整や、適切な難民に配布する調整などがされていました。

帰還はどのぐらい時間がかかるのか、そのためにはわれわれの支援はまたどういうところに目を向けなければならないのかを今日お伝えして終わりたいです。

78 年には、実は 2 国間の合意のもとで帰還作業が行われています。しかし、帰りたくない難民の暴動が一度発生しています。しかし、食料支援を停止するなど、強行な手段で 18 万人が帰還させられました。92 年にも帰還が合意されました。このときはやはり最初はうまくいかなくて、UNHCR が帰還プロセスに加わると比較的スムーズに進みます。バングラデシュ政府は 95%が自発的に帰りました」という話をしていますが、国境なき医師団は「帰りたくない人がたくさんいたんだ」というような疑問を投げかけています。最終的に 23 万人が帰ります。2005 年までかかっていますから、全部入れると 13 年近くかけて帰還が果たされています。

周辺コミュニティのひとつのチッタゴン丘陵では、仏教僧がイスラム青年たちにロヒンギャ事件の報復として暴行を受ける事件が起きていたり、仏教寺院に警察警護が 24 時間付く状態が続いており、緊張した空気です。仏教協会も記者会見を開き、ロヒンギャ難民に対してシンパシーを示すということで摩擦を避けようとしています。ロヒンギャ難民が口論から近隣の住民を殺害する事件が起きていたり、ロヒンギャの安い労働力の搾取、結婚を強要するような事件が起きたりということがちらほら出ています。

長期的に備えた支援が今後も必要で、帰還が決まったとはいえ、その進捗は順調に進むとはかぎらない。また、燃料として難民が近隣の森林の木々を切り取っていきます。森林の保護ということも気になりますし、妊産婦、新生児への対応、人身売買、人権侵害の監視、テロ活動の温床化を防ぐこと、移住計画が本当に適切なのかどうかを NGO 側も見ていく必要があるかというふうに思っています。どうもありがとうございました。

大橋

どうもありがとうございました。それでは続きまして、日本赤十字社の斎藤さんに、現場に入っていらしたので、そのことを中心に赤十字の動きを全体的にご報告いただきたいと思います。

斎藤之弥　**「現場の生活状況と赤十字による人道支援の状況」**

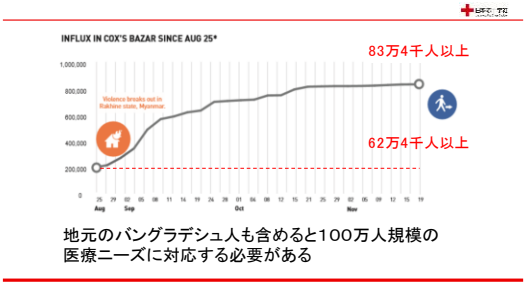
皆さん、こんばんは。日本赤十字社国際部の斎藤之弥と申します。バングラデシュに長く関わって働いてきましたので、その思いの分だけ、ちょっと日本赤十字社の公式見解とは違うかもしれま

せんけれども、お許しください。

大橋先生から頼まれたのが、地元の人たちはどうしているのということと、赤十字はどんなふうに人道支援をこの人たちに対して行っているのかということを分かりやすく話してほしいということでこちらにまいりました。初めにおことわりしておきますが、日本赤十字社を含めて、赤十字では「ロヒンギャ」という表現は使っていないんです。というのは、いろんな政治的な、そして民族的な、宗教的な背景がある。そうした中で赤十字は中立に立たなければいけない。今日、いろいろな先生方のお話でとても勉強になっているのですが、それはそれとして人道ニーズを必要とする人たちに支援の手を届かせなければいけない。そういうことから「ロヒンギャ」という言葉は使っていません。

そして、バングラデシュとミャンマーの両方で人道支援を行っています。先ほど渡邉先生はカチンのことで話をされていましたけれども、そちらのほうにも地元の赤十字社、国際赤十字と一緒に日本赤十字社も保健医療の支援をしてきたことがあります。地元に根差してずっと活動をしている赤新月社は赤十字と同じです。赤新月社と国際赤十字、それぞれがバングラデシュの領内とミャンマーの領内で活動を行ってきました。

それで、昨年の 10 月、11 月からいろんな出来事があって人々が入ってきて、いろいろと地元の赤十字社、赤新月社が支援を行ってきたのですが、結構それでは追いつかない状況になってきた。私も 9 月のこのあたりで現地のほうを見てきたのですが、「これは 60 万人いくよ」、「70 万人いくよ」と言っているうちにどんどん増えてきたんです。



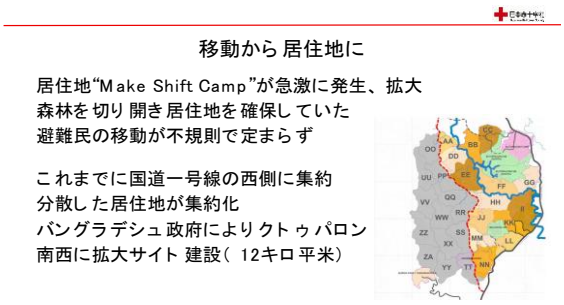
ここに書いたのですが、地元のバングラデシュの人たちも含めると 100 万人規模。例えば地元の医療サービスを考えると、入ってきた人たちだけ対象にしているわけじゃないですよね。地元の人たちも当然医療サービスが要る。そのキャパを超えてしまってはいけない。実際、超えているんです。それで支援を行っているのですが、この規模でやらなきゃいけないんだということです。

これは 9 月の中旬です。先ほど下澤先生がお話しされたような混沌とした状況で、素人が救援をやる。もう大変ですよ。トラックから救援物資を投げたりして、力任せに奪っていく人たちや、絶対本当に必要だなと思う人たちに届かないというような状況をよく目にしました。それで、日本でいう森林庁、フォレスト・デパートメントと軍隊、そして、地元の赤十字社がカウンターパートにしている「災害管理救援省(Ministry of Disaster Management and Relief)」というところがあるのですが、この 3 者が中心になって、もうえらい時間のかかるコーディネーションを行ってきた。

森林庁は大変ですよ。国立公園の木を切って、みんなどんどん入ってくる。軍隊はいろんなところから部隊がやってきて統制しようとする。また、災害管理救援省は、赤十字には任せるとしているけれども、他のいろいろなところ、また民間の企業の人たち、バングラデシュの人たちはすごく気持ちは熱いですから、救援しようと自分たちで救援物資を持ってやって来て混沌とした状況にとなっていました。そういう人たちの調整をというか、統制かもしれませんけれども、行おうとしているわけです。

地元の人たちはどうだったか。「メイクシフトキャンプ（Makeshift Camp）」と書いてありますけれども、森林を切り拓いて、そして、どんどん造っていくわけです。そういった中にたくさんメイクシフトキャンプがどんどん発生していく。

すごく困ったんです。医療救援をやろうというときも、ここだよという中心地がなかなか見つからない。どこへ行けば必要とする人たちの一番近いところに行けるのか。それで結局分かったのが、動き回る。向こうも動き回るんだから、うちも動き回るというので、今現在、6 カ所で移動診療を日赤は行っているんです。状況を話せば、国道一号線というのがコックスバザール県の内陸側を南北に走っているのですが、国道一号線から東側に数キロ離れたところがミャンマーです。そして、国道一号線の西側には新しい「エクステンションサイト」と言われているところがあります。クトゥパロンのサイトです。この TT、YY、こういうところ 6 カ所ぐらいで赤十字が今、医療の支援をしているのですが、これ以外にも非常に広く分布していますので、そこにも対応してやっています。このサイトです。まだ人々の移動というのは続く。中には、12 月 10 日からリロケーションも始まるという話もあるので、それにも、もし保健医療の必要があれば対応できるように準備していかなければいけないという報告が昨晩ありました。



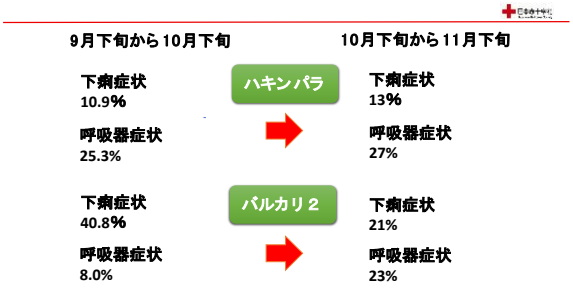
それと、これは私が撮った写真なのですが、雨が降ると雨水をこうやって使って、プラスチックシートと、シートだけでは暑いので、上に竹等、木を乗っけているんですね。これ、分かります？何だと思います？これはソーラーパネルなんです。大事に持ってきたんですね。みんな逃げるときって、やっぱり大事な物って持っていくじゃないですか。そういったものは結構目にするんです。これは私の撮った写真なのですが、結構密集しているでしょう。木を切って、こういう中にどんどん、どんどん入っていく。これが 200 世帯とか 300 世帯ごとに区分けされて自治会が作られている。会長さんというか、世話役ですね、こういう人たちが地元の人たちの話を聞いたりしているというのが現状でございます。

メイクシフトキャンプというのは、ほとんどの人が救援物資に頼らざるを得ない状況なのですが、当初、非常に混乱をきわめたものも多分に秩序立ってまいりました。それでも救援物資に頼ってというのは大変な状況ですよね。皆さん、同じような状況になったらどうします？自分で何とかしたいと思いますよね。

衛生環境なのですが、ここに出しているのは、実はいいほうです。きちんと中に便器があって足を掛けられるようになっていて、下にタンクがあってと。他はこんなんじゃないんですよ。ほとんどの人たちは、もう、穴を掘って板を渡して、それでプラスチックシートでちょっと囲って、それが寝起きする場所のすぐ隣とか、ハエがブンブン飛んでくるところにあるわけです。極めて衛生状況は良くないです。大変なんですよ。私どもは、そういった中で医療診療を行ってきました。今でも一日に 200 人から 300 人の患者が来院します。移動式のクリニック。実はこれを作ってくれたのは、自治会長さんたちに話をして地元の人たちにお願いして、謝金も払いますし、素材も渡しますけれども、造ってくれる。自分たちで造ると、やっぱり自分たちの診療所だなというふうに思うので非常にいいわけです。今、6 カ所あるのですが、それ以外にも少し大きな仮設の診療所を造って、より多くの人たちに対応できるようにしています。ニーズは非常に高いです。

巡回診療

症例傾向からいうと、下痢。ハキンパラ、バルカリ——バルカリは、「バルカリ 2」と書いてあるのですが、ちょっと新しいほうなんです。新しいところって結構下痢が多いんですよ。状況を見ると、9 月から 10 月、10 月から 11 月を比較して、下痢症状は 4 割の人がそうだったのが、2 割に減ってきている。それでも、ハキンパラとバルカリ 2 の下痢症状 13%と 21%。比べてみてください。まだまだ安全な水へのアクセスとかそういうのが良くないというのが分かると思います。



授乳中の母親の栄養状況。いろいろ移動していく中で、栄養状況は子供の成長に影響しています。測ってみると、やはり非常に深刻な状況になっています。実際に巡回をしたり、普通、WHO などは、TBA（Traditional Birth Attendant)、伝統的なお産婆さんではなくて、ちゃんと医療の勉強をした資格を持った人たちのところで妊産婦健診をしなさいというわけですが、この状況では、もうそれどころじゃないです。伝統的なお産婆さんと一緒になって、その人たちに、こういうふうにしよう、ああいうふうにしようと指導しながら地元で対応しているというのが現状と言っていいと思います。

それから、心のケアの活動。心のケアの活動は、例えば成人男性のグループでは凧を作って、子供たちに渡すんですね。女性のグループのためにボランティアが今、訓練を受けています。また、心のケアの活動を子供たちにも提供しています。今、縫製のミシンを使って、自分たちに必要なものを自分たちで教え合って作っていこうという活動も少しずつ始められてきました。

赤十字の支援はこれだけやっています。ミャンマーでもこれだけやってきました。

赤十字の支援（ バングラデシュ ）

43万3千人に支援
- 13,710リット ルの安全な水
- 25,392人を 診療
- 34,012世帯に避難シェ ルター を提供
- 884,064キロ の食糧を提供

赤十字の支援（ ミャンマー）

18万人に支援
- 350,180リット ルの安全な水を提供
- 移動診療と15診療所の支援
- 42,560人に救援物資を提供
- 119,000人に食糧を提供
- 8,160人に衛生サービ スを提供

動きとしては、当初やっていたのを、9 月にいろいろあってから 3 倍に拡大した。10 万人を対象に支援すると言っていた、それをさらに 20 万人対象で 2019 年 6 月末までをターゲットにしてやっていこうとなっています。それから、バングラデシュ、日赤もいろいろ募金を開始して、そして、機材も人も出しています。これまでに 50 人以上派遣しているのですが、3 月末まで、もう誰が出るというのは決めています。そして、地元のスタッフが 55 人ぐらい一緒にやっています。これは素晴らしくいい支援をする機会になっています。
どうもありがとうございます。

大橋
斎藤さん、どうもありがとうございました。現場ならではの声を聞かせていただきました。ありがとうございます。それでは、日下部さんにお願いをしたいと思います。

日下部尚徳　**「ロヒンギャ問題を巡る地政学：ARSA を含めて」**
東京外国語大学の日下部です。国際協力および南アジア地域研究を専門としております。
私の話は、下澤さんの話の続きから始まります。具体的には、バングラデシュ政府がロヒンギャ難民発生当初、なぜ支援に対して消極的だったのかというところから話を進めたいと思います。
イスラム教徒が 9 割を占め、ベンガル人の国という意味をもつバングラデシュでは、ベンガル系イスラム教徒であるロヒンギャに対して一定の親近感をもち、同情する人が多くいます。しかし、ロヒンギャ難民発生当初、同国政府は、ロヒンギャを弾圧したミャンマー政府を擁護する立場をとりました。背景には 2016 年 7 月におきた日本人 7 人を含む、民間人 20 人が殺害された「ダッカ襲撃テロ事件」以降、イスラム武装勢力掃討作戦を行うバングラデシュ政府にとって、ミャンマー政府および軍部との協力関係が不可欠であったことや、最終的な難民のミャンマーへの送還を念頭に置き、ミャンマー政府と良好な関係を維持したいという思惑がありました。さらには、ミャンマーを通って中国に抜ける交易ルートの開発にバングラデシュ政府は関わっていますので、こういった開発案件に影響を与えたくないということです。

この地図で見てもらうと分かりやすいのですが、国土の 9 割はインドと接していますので、内陸を通って中国に行こうとすれば、必ずインドを通らなくてはいけません。現在は、親インド政権ですので大きな問題はないのですが、やはり安全保障上、ミャンマーを通って中国に抜けるルートはきちんと確保しておく必要があります。
さらに、バングラ政府が消極的だった理由として、インドの存在があります。渡邉弁護士もご指摘されていましたが、過去に、78 年、それから 91 年から 92 年にかけてもバングラデシュ側にロヒンギャ難民が流入していますが、その際にインドがどのような対応をとったのかみていきたいとおもいます。

これはインドの新聞記事ですが、91 年にロヒンギャ難民が発生した際にこのような記事が出ています。「インドの裏庭と呼ぶべき場所で巨大な兵器のステージを打ち立て、トラブルスポットを創り出そうとしている。」「インドの主たる関心は、ロヒンギャ迫害の物語がインド亜大陸におい

てムスリム原理主義の炎をさらに燃え上がらせるのではないか」。このような報道からも、ムスリムが多数のバングラデシュとヒンドゥーが多数を占めるインドでは、かなりロヒンギャに対する認識が違うということがお分かりになるかと思います。

バングラデシュでは 2009 年以降親インド路線をとるアワミ連盟が政権与党の座にあり、両国は政治・経済の両面で緊密な関係にあります。また、国境を越えて移動するイスラム武装勢力の動向は両国共通の関心事項であることから、イスラム武装勢力との関係が疑われる ARSA の襲撃に端を発する今回の問題に関しても両政府は歩調を合わせたといえます。

91年ロヒンギャ難民流入時のインド

- 「‥‥‥難民の数は17万5000人に膨れ上がった。さらに多くの人々が船で到着している。そして実質的にはインドの裏庭と呼ぶべき場所で巨大な悲劇のステージをうちたて、トラブル・スポットをつくりだそうとしている。インド外務省は、難民流入はすでに乏しい資源の流出を意味するとして、これまでのところバングラデシュに対する同情を表明したにすぎない。しかしインドの主たる関心は、ロヒンギャ迫害の物語がインド亜大陸においてムスリム原理主義の炎をさらに燃え上がらせるのではないかということである。」
- (India Today, April 15, 1992, 村山真弓訳,一部改変)

インドでは、ARSA による襲撃事件直後の 8 月 28 日にキレン・リジジュ内務閣外大臣が国会において、安全保障上の脅威であることと、安い労働力の流入による賃金低下を理由に、国内にいるロヒンギャを国外追放するという方針をあきらかにしました。現在ロヒンギャ難民は、バングラデシュ南東部最南端にミャンマー側から越境し、難民生活を送っていますが、その北側には、バングラデシュ政府と少数民族間の土地問題を抱え、イスラム武装勢力の基地も複数あることが報告されているチッタゴン丘陵地帯があります。さらにその北には、宗教、民族間での紛争問題を複数抱えているインド北東州があり、これらの地域を縦断する形で、武装勢力の資金、武器、人的ネットワークが形成されることをインド政府は警戒しているのです。

インドは世界第 3 位となる 1 億 8 千万人ものイスラム教人口を抱えています。これだけの人口規模がありながらも、国民の多数派はヒンドゥー教徒で、イスラム教徒は少数派になります。ヒンドゥー至上主義的な言動で知られるモディ首相が 14 年に政権の座について、イスラム教徒が社会的な疎外や政治的な差別を感じる場面が増えたともいわれています。このような状況下で、国内のイスラム武装勢力がミャンマーにおけるロヒンギャの迫害を理由に過激な行動にでることをインド政府は恐れているのです。インドには、過去に起きたミャンマー国軍による弾圧から逃れた人びとや経済移民など計 4 万人のロヒンギャが暮らしています。そのうち 1 万 6 千人が UNHCR の難民認定を受けていますが、インド政府は難民認定を受けているロヒンギャも同様に国外に追放されるべきと主張しています。

これに対して、ロヒンギャの代表 2 名が、インドの最高裁に政府の送還方針を撤回するように求めています。これに対して最高裁は現在、国家の安全保障と経済的利益は重要だけれども、人道的アプローチをとるべきだとする見解を出しています。最高裁としてはロヒンギャ寄りの判決を出せば政府からにらまれ、インド政府寄りの発言をすれば国際社会からの批判にさらされるわけですので、判決は延期されています。

さらに、インド政府は現在ラカイン州でのインフラ整備支援を加速させており、インド北東州からミャンマーのラカイン州沿岸都市シットゥエーまでを陸路と水路で結ぶことで、インド北東州の経済発展を推し進める計画です。

バングラデシュ現政権は親インド路線をとっていますので、インドの方針に追従する形でミャンマー政府に対する批判を避けてきたと言えます。それによって、下澤さんがご指摘されたような、ロヒンギャが越境してこないように、生かさず、殺さずの難民政策で、最低限の支援にとどめるといった対応になったわけです。

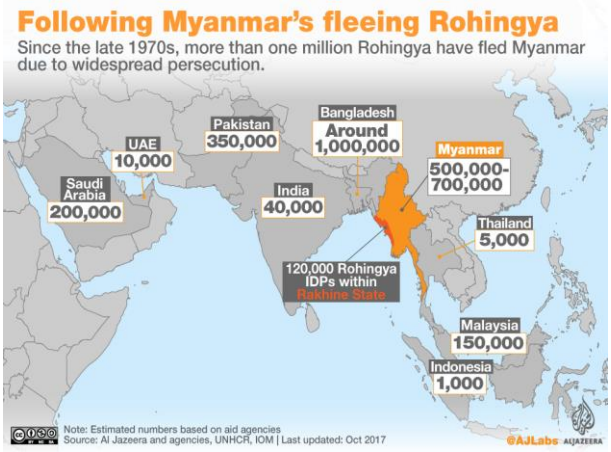
しかし、急増する難民と国際社会の関心の高まりから、インドとバングラデシュのロヒンギャ難民政策は変更を余儀なくされます。バングラデシュ側の方針転換の背景には、ロヒンギャ難民に対して支援を十分に行わないことに野党やＮＧＯ、イスラム保守層からの批判が高まったことがあります。とくにイスラム保守・タカ派「ヘファジャテ・イスラーム：Hefazat-e-Islam（HI）」などが積極的な政府批判を展開しました。HI の代表は、「(イスラム教徒である）ロヒンギャへの弾圧がやまなければ、ミャンマーでジハードが起きるだろう」と発言するなど、政府に対する脅しとも言え

る発言をくり返しました。2018 年末～19 年初頭に予定されている国会総選挙を前に、野党勢力やそれを支持するイスラム保守系団体がロヒンギャ問題を政治化し、与党批判の材料として使うのを無視できないという政治的な背景が、結果としてロヒンギャ支援を推進する原動力となったのです。

インドとしても親インド政権であるアワミ連盟に政権の座にいてもらう必要があり、支援を最小限にすることによりロヒンギャをバングラデシュに入れないという政策から、バングラデシュとミャンマー両政府にロヒンギャを厳重に管理させる政策へと方針を転換せざるを得なかったといえます。

次に、今回事件を起こした ARSA がどのような組織なのかを見ていきたいと思います。この ARSA はミャンマーの軍、警察基地を襲ったグループです。攻撃を指示したのがアタウラーという人物だと言われています。アタウラーは、パキスタンのカラチのロヒンギャ難民キャンプの生まれです。1960 年代に迫害から逃れてミャンマーからカラチに両親が移住しました。本人はカラチの難民キャンプで育っているのですが、その後、サウジアラビアに渡って教職についています。そこで富裕層の目にとまり、お金持ちの家の家庭教師などに雇われ親交を深めたと言われています。しかし、2012 年のラカイン州における仏教徒とロヒンギャの衝突を機にパキスタンに戻ることになります。パキスタンでは武器、戦闘員を調達して、アフガニスタンで活動しているようなイスラム武装勢力の軍事訓練に加わる計画だったと言われています。資金源は、サウジアラビアの富裕層、それから、サウジアラビア在住のロヒンギャとされています。

アフガニスタンやパキスタンのタリバン、インドやバングラで活動している武装勢力と接触したらしいのですが、交渉がうまくいかなかったようです。武装勢力にお金をだましとられといった報道もなされており、こういった事情からイスラム武装勢力に根強い不信感を持っているとされています。



この地図は、アルジャジーラのものですが、世界各国のロヒンギャ人口を示しています。アタウラーの両親はミャンマーからパキスタンに渡っており、本人はパキスタンからサウジアラビアに渡って、サウジアラビアからパキスタンに戻ります。そしてミャンマーに入って武装闘争をはじめたわけです。私たちは、世界にこれだけロヒンギャの人たちがいることを理解する必要があります。サウジアラビアに 20 万人に、UAE に 1 万人、マレーシアやインドネシアといったイスラム教の国にもこれだけの数がいるわけですので、アタウラーとは異なるルート、ネットワークをくしして、過激な行動にでる人がでてくる可能性は十分にあると言えます。例えば、マレーシアでお金を集め、パキスタンでトレーニングし、インドでテロを起こすことも、ロヒンギャの人口分布や人的ネットワークを見れば可能だということになります。これが、インドが一番恐れていることであるとも言えます。

話を ARSA に戻しますがコーランとハディーズに基づいて指令を出しており、海外のウラマにフォトアを求めるなど、イスラム的要素が少なからずみられる組織です。「フォトア」とは、イスラム的にはこのように解釈できますよという見解をイスラム法学者に出してもらうことです。ロヒンギャへの迫害は、民族のみならずイスラム的にも問題であるということを世界のムスリムに共有してほしいわけです。ARSA はこのような要請を「Twitter」などで流しています。

さらに、JMB やフジバングラデシュなどのバングラデシュのイスラム武装勢力と共闘していたロヒンギャの武装勢力があるのですが、そこのメンバーが ARSA に合流しています。そのため、ARSA 自体は武装勢力との関係は直接的に見られないのですが、こういった要因から非常にイスラム的な組織であると少なくともミャンマーでは考えられています。ARSA は 2012 年以降、武装闘争を続けており、その延長線上に、2017 年 8 月 25 日のミャンマー警察、軍への襲撃事件があります。ただ ARSA はこれまで、軍や警察といったハードターゲットを狙っています。近年のイスラム武装

勢力のテロというのは、基本的にソフトターゲットを狙っています。イスラム武装勢力的なテロをやろうとしたら、大都市で銃を乱射するとか、人がたくさんいるところで、爆弾を爆発させるといった手法のほうがトレンドとしてはあっているわけです。しかし、ARSA はハードターゲットに対して、極めて原始的な武器で攻撃しており、こういったことからもイスラム武装勢力との方向性の違いがあるように思われます。

また、「Twitter」上で国連やアメリカ、イギリス、フランスといった欧米諸国に対して名指しで支援を要求しています。これも国際的なイスラム武装勢力とは異なります。

こういったことから、SNS を使う手法やイスラムの実践を重視しているという点では共通点が見られるのですが、国際的なイスラム武装勢力からの直接的な指示命令系統はないのではないかと私は考えております。

これは 2016 年の ARSA による攻撃の際に出された声明の要約なのですが、まず、ロヒンギャがミャンマー政府によって迫害を受けていることは明白だということを言っています。また文明世界による真の援助によって、目的を達成したいというふうにも書かれています。この声明にイスラム的要素が一切入っていないということ、それから、この文明世界というのは、いわゆるミャンマー政府が野蛮であるということの対比で使っていることが予想されますが、ターゲットが明確にミャンマー政府、ミャンマー軍部であるということが理解されます。

最後になりますが、国際的な要素に加え、ラカイン州内におけるいくつかの要素が問題を複雑にしています。まず ARSA が民族自決、つまり、民族的な価値観に重きを置く集団であったとしても、仏教徒にはイスラム教徒によるミャンマー侵略の一環に見えているということです。一方で、ラカイン仏教徒の人たちからしてみると、軍やビルマ族の支配が強化されるのもロヒンギャの増加と同等かそれ以上の脅威だと考えられています。既にラカイン州の南部は軍の軍用地がかなり増えており、現在も軍による土地の摂取が続いています。それに対抗しているのが、ラカイン族の武装勢力であるアラカンアーミーなのですが、2017 年 11 月に国軍はアラカンアーミーに対して、掃討作戦を実施しています。さらに、ラカイン州議会で最大の勢力であるラカイン民族党の党首が突然辞任するという動きもあり、ラカイン州全体が不安定な状況にあります。このような動向に鑑みると、軍部の狙いがロヒンギャだけなのかという視点も今後重要になってきます。ラカイン州の権益がどこにあり、それを誰がねらっているのかをみることによって、問題を俯瞰し、分析していく必要があると考えております。ロヒンギャ難民問題を考えるには、ミャンマー国内だけでなく、インドやバングラデシュ、中国を重要アクターとしてとらえ、動向を注視していく必要があるといえます。

大橋

ありがとうございました。それでは、続いてパネルディスカッションに入りますので、登壇者の方々、発言者の方は登壇をお願いします。

なお、今、日下部さんが説明された ARSA ですけれども、フルネームは「Arakan Rakhine Salvation Army」ですよね。アラカン州のラカイン族を救う軍隊というふうなものでこの略称になっております。

それでは、これから先のモデレーションは、シャプラニール事務局次長の藤﨑さんにお願いをいたします。

藤﨑文子　**「シンポジウム」**

ありがとうございました。ご紹介いただきました、シャプラニール市民による海外協力の会事務局次長をしております、藤﨑文子と申します。

まず、私がなぜここにいるのかということをお話しします。シャプラニールは 1972 年、バングラデシュで活動を開始しました。その後、バングラデシュとネパールで活動をしているのですが、1992 年、登壇されている下澤さんがシャプラニールの職員だったときにロヒンギャ難民への支援を行っています。その当時、約 1 万 1,000～1 万 2,000 世帯に対して食糧や生活用品、蚊帳、衣類等の提供を行ったという記録が残っています。それ以降、ロヒンギャの問題に関しては、私どもは行っ

ておりません。その後、今回の大量流入を受けて、さすがにもう見過ごすわけにはいかないということで、私が 9 月の末にロヒンギャの実態を確認するためにネパールから出張しました。9 月の末から 10 月の初めにかけて、コックスバザールとロヒンギャの難民キャンプを 2 回訪問して見た状況をもとに約 3,000 世帯ぐらいへの物資および食糧の緊急支援を決定、行いました。

それでは、パネリストの方へお伺いします。

まず渡邉さん。今回の登壇者の中ではミャンマー側からの視点で詳しく話していただきありがとうございます。私がコックスバザールに滞在いたときに、ミャンマーのテレビが入りました。たぶん国営のテレビだと思うのですが、そこで流れているものには一切、政治的なものがなくて、「子供たちが楽しく勉強している姿」ばかりで、ラカイン州で起きていることは全く報道されないということに衝撃を受けました。

ミャンマーの軍が実質的には政権を掌握している中で少数民族の独立要求から目を逸らすためにロヒンギャが利用されているという構図があるというお話が先ほどありました。実際にロヒンギャの問題がミャンマーの国民の人たちの中でどのぐらい認識がされているのか、されていないのかという点について、教えていただけますでしょうか。

渡邉

ありがとうございます。ミャンマーにおける報道の自由という問題から言いますと、やはり、かなり制約を受けている状態で、NLD が政権を握った後も、まだ軍を批判するような、例えば「Facebook」上の投稿があったりすると捕まったり、そういった状況はまだまだあります。

ただ、このロヒンギャの問題に関して言うと、もちろん「ロヒンギャ」という言葉は国営テレビでは使わないし、ミャンマーの中では使われていないわけなのですが、ロヒンギャという存在を認めていませんので、ベンガリーみたいな形で言うわけです。そういう問題があるということは、おそらくほとんどのビルマ人、ミャンマーの人は認識していますが、どちらかというと、やはり軍がよくやっているという、そういう方向での見方をしているというふうに私は思っています。残念ながら、やはり NLD の中でもアウンサンスーチーさんが、本来といいましょうか、この問題についてきちんとした発言が意識としてできる人だとは思うのですが、その人がやはりものが言えないという状況が継続しています。それはまさに軍がそうであるということと同時に、NLD の中でも、やはりアウンサンスーチーさんはそこの部分での認識において浮いていると。要するに、彼女の認識が NLD の中で支持を得られないという実態だということだというふうに思っています。

その意味で、ロヒンギャの問題は知られていますけれども、先ほど言ったような意味で、少数民族との紛争問題に関して言うと、例えばカチンにおける酷い爆撃の状況であるとか、今おっしゃっていただいたアラカン難民が攻撃されているみたいな話というのは、それは逆にあまり伝わっていない。つまり、少数民族問題を隠す絶好の材料になっているというのが私の認識です。

藤﨑

ありがとうございます。他のパネリストの方からもご質問やコメントがあればぜひお願いします。

下澤さん、1992 年の現場入りから数えて 25 年ぶりに同じ場所に行かれて、いろんな思いが込み上げてきたのではないかと想像します。私が現場に行ったのは下澤さんの訪問に遅れること約 3 週間だったと思います。難民キャンプの状況はその 3 週間の間で激変をしていて、よくコーディネートされているなという印象をむしろ持ちました。一方で必要な支援はまだ行き届いていないというのが現状だと思います。

シャプラニールが支援活動について検討をしていた最中に、バングラデシュ政府による支援指針が出されました。それが非常な違和感を与える内容でした。とにかく年度内は生き延びるための支援に集中してください、具体的にはシェルター、食糧は WFP による支援が行き渡っているという前提なので食糧以外の物資配布、健康面と家族計画への支援、水およびトイレ、これらに絞ってくれと言われました。人権侵害やドメスティックバイオレンスのようなものに対する啓発活動をしたいと思っても、政府からは認可が出ないだろうことは想像に難くない状況でした。具体的に配布す

る物資にも大きく規制がかけられたりもしていました。このような状況を踏まえ今後、ジュマ・ネットとしてやりたいと思っていること、どのような形で進めようと考えているのかについて伺えますでしょうか。

下澤
ジュマ・ネットは、物資配給を得意する団体ではもちろんないので、難民キャンプの中の治安、人権侵害とか、そういうものもできるだけ見ていきたいです。一番関心があるのが、本当の自由意思に基づく帰還が行われるのか、これが一番大事な点だと思っています。2 点目は、10 月のときもそうでしたが、ものすごいレイプの被害が続いたのではないかと思います。妊婦の人たちのケアがどのぐらい必要とされるのか、特に生まれてくる子供への差別とか妊婦ケアというものはもう少し特殊の扱うべきではないかということで、レイプおよび妊婦被害者のケーススタディーをもう少ししておきたいと思っています。
あと、長期化された 92 年のことを思うと、ロヒンギャの子供たちは教育機会や、住環境の整備、医療サービスの充実が重要だと思っています。できるだけ私たちは、その権利や人権に基づくところに少しフォーカスを当てながら声を出していく役割を、今、12 月に調査チームを入れています。調査チームで現状がどうなっているかということと、帰還に当たる意見の集約をしていて、これもできるだけ関係者に使っていただきたいなと思っています。以上です。

藤﨑
ありがとうございます。私の知っている方が、難民の人たちに「ミヤンマーに帰りたいですか？」と尋ねたところ、8 月の事件以前では、多くの人場安全であれば祖国に帰りたいと答えたそうなのですが、今来ている人たちは、「戻りたい」と言う人と、将来について懐疑的で「戻りたい」と言えない人がかなり混ざっているというふうに聞いています。
では、斎藤さん。医療というのはいろいろな団体がやっていると思います。現地の医療機関とのコーディネーションなどが重要だと思いますが、そのあたりはどうなっていたのか教えてください。また、先ほどの時間の中で伝えられなかったことがあればお話ください。

斎藤
ありがとうございます。主に日赤は医療支援を行っているわけですけれども、今日も現地でいろいろと活動してきた人たちが会場にいるんですが、バングラデシュ国内では、日本人とか外国人の医師、看護師、助産師、薬剤師もそうですが、普通は自分たちの国の免許では仕事ができないんです。けれども、バングラデシュの政府も外国人の医療行為を認めざるを得ないほどの状態でした。
そういう医療サービスを提供するときにうちが心掛けたのが、やはり地元のバングラデシュのお医者さん、助産師さん、医療職の人たち、ボランティア、そういう人たちと一緒にやろうと。そして、一人一人の免許の書き換えができないので、むしろ地元の保健局の人たちに「どうしたらいいだろう」というふうに相談をした。そうしたら、あちらからも「じゃあ、一緒にやろう」ということで進めてきたという経緯があります。
それから、先ほど下澤先生からもお話がありましたけれども、特に女性への暴力というのが深刻に語られている。体の面でも心の面でもまずケアが必要ということで、うちだけではなくて、いろんな機関と連携しながら支援を行っているというのが現状です。藤﨑さん、ありがとうございます。

藤﨑
ありがとうございます。渡邉先生のほうから日本におけるロヒンギャの人たちの存在ということをぜひお話を伺いたいと思います。よろしいでしょうか。

渡邉
申しわけありません。このことだけは一言私の立場として言っておかなければいけなくて、実は

日本にはロヒンギャの人たちが 200 人～250 人ぐらいいます。そのうち日本で難民認定を受けているロヒンギャの人は、おそらく 20 人に満たない数です。その 100 人弱の人が人道配慮ということで在留資格を与えられ、それ以外は家族です。ただ、まだ 20 人ぐらいの人が在留資格も与えられないままに、難民も認定をされないままに非正規な、つまり不法滞在者として存在している人たちがまだいます。しかも、今、3 人、入管に収容されています。このロヒンギャの人たちを収容するとは何事かと私は思いますけれども、それが今の日本の実態です。

それともう一つ、実は「第三国定住」というプログラムが始まって、カレンの人たちを中心に日本に来てもらっているわけですけれども、その中に、一家族、ロヒンギャが実は入っています。しかし、そのことは全く報道されない。本来ならば第三国定住でロヒンギャの人を入れたことをもっと公にして、日本はもっとそこを公に言っていいと思うのですが、そういうことはやらない。日本は、対外的には UNHCR にお金をいっぱい出しますけれども、実は足元の難民に対しては全く顧みていない。今のロヒンギャの人たちを難民として認定しないということは、絶対考えられないことですけれども、そういう状況があるということをぜひご理解ください。よろしくお願いします。

藤﨑

ありがとうございます。それでは、フロアのからのご質問を受けたいと思います。

質問者 1

どうもありがとうございます。東京大学の質問者 1 と申します。日下部さんのほうにご質問なのですが、インドの話が聞けて、私も知らなかったので非常に勉強になったのですが、同じ大国として中国ですね。直接的にはそのロヒンギャ問題にタッチしていないだろうと思うのですが、以前、日本にいられるロヒンギャ難民の方のお話を伺ったときに、今回の襲撃も含めて、中国が後ろで資金援助したりしているんじゃないかというようなことも言われて、ちょっとびっくりしたのですが、背景として確かに少数民族地域でのいろいろな、カチンを含めて、そういう噂というか、そういうこともありますし、アラカンは、またチャオピューのところに軍事基地を造るというような、私も見てきましたけれども、そういう意味で背景的には中国の経済的な利益というのが軍との利権ということでつながっている構造というのがあるのかどうか、その辺の見解をお伺いできればと思います。

藤﨑

先にご質問を伺ってそれぞれ回答者に準備をしてもらいたいと思います。その他にご質問ある方。

質問者 2

ネットでニュースを配信しておりますところの質問者 2 と申します。ラカイン州を国軍がどんどん接収しているという話なのですが、ラカイン州を守りたい理由というのは何なんでしょうか。例えば天然資源、鉱物とか石油とか、そういったことなのか、あるいは対外的なことなのか、あるいはミャンマーの国内的な理由なのか、そこを知りたいと思います。よろしくお願いします。

藤﨑

ラカイン接収の件は日下部さんが触れられていたので、これも日下部さんにお願いします。

質問者 3

設立 15 周年を迎えた小さなボランティア、医療関係の組織の理事長をしております、質問者 3 と申します。昨日も渡邉弁護士の参議院議員会館でのお話をお伺いしました。私ども、実は来週の月曜日にバングラデシュに医療チームを派遣する予定なのですが、ロヒンギャの問題が起こってからずっと関心を持って、私どもも結束をして派遣をしたいということで、過去、十数回、海外での医療派遣を行っているのですが、今回に限り、私どもは、昨日もお話にありましたジャパン・プラットフォームから助成金を頂戴してミッションを遂行しているのですが、今回に限り本当に逆風が吹

いているのか何か知りませんが、手続が極めて困難で、外務省の国の資金を使って派遣することになるんですが、来週の月曜日に派遣なのに、まだ承認が下りないという事態があります。のみならず、昨日からご指摘のようにマスコミも、もう、お昼のワイドショーから朝のワイドショーに至るまで日馬富士問題ばっかりですね。ロヒンギャ問題なんて、「ロ」の字も出てこない。まさにマスコミのガラパゴス化が起こっていると僕は思うのですが、こういう事態は、やっぱり声を大にして、官民共々、昨日もちょっとお話にありましたし、先ほどもお話にありましたが、JPF は……。

藤﨑
　すみません、手短にお願いできますでしょうか。

質問者３
　そんなことで、本当にわが国には逆風が吹いているということを痛切に感じている小さなボランティア組織の代表です。

藤﨑
　ありがとうございます。では、ご質問ある方、挙手をお願いします。

質問者４
　慶応義塾大学の質問者４と申します。先ほど日本のメディアをお話になったのですが、この間、ラカイン州には私自身が行ってきて思ったのは、ミャンマー側のメディアに相当な問題があると思います。このバングラデシュ側の情報を写真とかを交えて説明していただいて、それを例えばラカインの人に見せたところで、これは完全にフェイクだとか、バイアスが掛かっているとか、そういった話に絶対なるんですね。BBC やアルジャジーラのニュースというのは全部嘘で、彼らはすごい強力な IS 系の資金をもらってテロを起こしているテロリストだという扱いなので、そういった現状を打破するために、つまり、メディアにおける分断だったりとか、対話というものを促進しないと改善しないものだと思います。どうやったらいいとお考えですか。

藤﨑
　誰に対した質問になりますでしょうか。

質問者４
　これは、できたら皆さんにお伺いしたいところなのですが。

藤﨑
　では、渡邉さんのほうからお願いいたします。

質問者５
　アジア女性資料センターの質問者５といいます。下澤さんと斎藤さんからレイプの問題と女性の暴力の問題を聞かせていただいて非常に衝撃を受けています。日本でも実際にこの問題というのは訴えた人もまたセカンドレイプを受けるという現状がある中で、そういう人たちの情報はどういう形で把握されて、そして、それに対する支援というようなことをするとしたらどういうことが可能なのかということを、アドバイスがあったら聞かせてください。

藤﨑
　ありがとうございます。下澤さんと斎藤さんにお願いいたします。

質問者６
　東京大学の非常勤講師をしておりまして、絵本の翻訳者をしております、質問者６と申します。今、日本の子供たち、あるいは教育現場で難民という問題をどうやって教えたらいいのか、どうやって理解してもらったらいいのかということを念頭において、難民をテーマにした絵本の翻訳をしており、さっき斎藤さんがおっしゃったように、「もし、あなただったらどうしますか」ということを今、日々考えているところです。下澤さんにお聞きしたいのですが、難民キャンプで素人が物資の配布をするということがとても危険だとおっしゃっていたのですが、実際に NGO の方々とか、そのノウハウをお持ちの方々が物資の支援を配布されるときはどういう形でされていらっしゃるのかという、そういった具体的なことを教えてください。それから、先ほど下澤さんたちのジュマ・ネットが現地に入られたときに他の NGO が全く入っていない状況だった、日本の大きな NGO も入っていない状況だったというふうにおっしゃっていたのですが、そこには何か特別な理由があったのかどうかということ、それから、今回、ロヒンギャの難民キャンプでムスリムの人たちの生活上のタブーみたいなものがあるかと思うのですが、そういった中で難民キャンプでの管理や運営、支援をする中で障壁になる部分のような、何か特殊性があれば教えてください。

藤﨑
　ありがとうございます。それでは日下部さん、中国の影響についていかがでしょう。

日下部
　ありがとうございます。質問者がご指摘いただいたとおりだと思います。経済、それから軍事の面で、中国は非常に大きな影響力をもっています。具体的には、中国はラカイン州から中国に続くパイプラインを建設しています。また、軍事的には、ベンガル湾での影響力を強めたいと考えています。もともと中国はチッタゴン周辺で潜水艦も停泊できるような港を造ろうとしていたのですが、受注競争で日本に負けてしまいました。そのため中国は、そのベンガル湾の東側に位置するラカイン州に港を造りたいという思惑をもっていると考えられます。
　それから、経済的な面で言いますと、今回の事件との関連性があるとも言われているアナンレポートには、には、ラカイン州のロヒンギャ問題を解決するためには経済が重要であり、そこでの経済発展は、そこに住んでいる人たちに裨益するような形でやるべきなんだというようなことが書かれています。つまり軍が主導で一部の人たちが利益を得るような経済開発ではなく、そこにいる人たちが裨益するような民主的な経済活動をしましょうというようなことが書かれています。この内容どおりに開発が進んでしまっては、もしかしたらラカイン州に他の開発アクターがはいってくる可能性もあるわけです。中国としては、ミャンマー国軍の開発独裁のもとラカイン州の経済権益を自国に都合のよいように仕向けたほうが都合がよいわけですので、軍部との関係をよくしておきたいという思惑はあるかと思います。また、現状では欧米諸国が徹底的にミャンマー政府の対応を批判していることから、ミャンマー政府は中国を頼るほかない状況に追い込まれているともいえます。

藤﨑
　ありがとうございます。ラカイン州接収の理由ということで引き続き日下部さんにお願いします。今お話しいただいたところにも関わってくると思いますが。

日下部
　現在ラカイン州に経済特区をつくる計画あるといわれており、経済の拠点をつくるための土地の確保が一つあると思っております。

藤﨑
　ありがとうございます。次は、渡邉さんへの質問です。ミャンマーのメディアに問題があるのではないか、このメディアにおける分断をどうやったら解決できるのかという点についてはいかがで

しょうか。

渡邉
　ありがとうございます。最近は日本も報道の自由がほとんどなくなってきていますけれども、ただ、ミャンマーの報道の自由のなさというのは、やはり軍政時代からずっと続いていまして、基本的にNLD政権下になっても、そこはやっぱり変わっていないなというふうに感じざるを得ないところです。先ほども言いましたように、例えば「Facebook」で閣僚の批判をしたりするとすぐ捕まってしまうみたいなところがあったりします。それと、ジャーナルを作っている人たちがいろんな自由な発信をしたりすると、いつの間にかその人が殺されていたりもするというようなことがあったりもします。ですので、報道の自由度に関して言うとかなり以前と変わらない状況が続いている問題があります。
　そこは、報道の自由そのものに対してどういうふうに改善していくのかということについて言えば，国軍の権力支配が継続している以上非常に困難な状況が続いているというふうに思っています。独立メディアも頑張っているとは思いますが，そこは外圧も必要かなと感じているところです。
　ただし、このロヒンギャ問題について言うと、その報道の自由という問題とはまた違って、まさに差別の問題がビルマ全体を覆っているということだと思います。先ほども言いましたように、少数民族の人もロヒンギャの人たちを差別する、民主化運動をやっている人たちもロヒンギャを差別する、こういう構図があります。62 年に軍政が樹立されて以来、ずっと教育現場の中で自分たちがずっと植え込まれてきた差別意識に基づくものだということを彼らが自分の頭の中で整理できていないというところに非常に問題を感じています。なので、その差別の問題だということ、あるいは法の支配の在り方とは違う、その世界に自分たちがいるんだということを、きちんと理解をしていくということが必要だと思っていて、それが今の状況では、まさにアウンサンスーチーさんが一人、今は、孤軍奮闘すらもできない状態なのですが、そういうような状況だというに思っていて、それはやっぱり本当に少しずつ少しずつ変わっていくしかないというふうに思っています。

藤﨑
　ありがとうございます。女性のレイプや女性に対する暴力をどうやって扱っていったらいいのかということを下澤さんと斎藤さんに質問がありました。どちらから先にお答えいただけますでしょうか。

斎藤
　すごく深刻な問題であるのですが、バングラデシュの領内にようやくたどり着いた、その人たちにヒアリングをすると、「ああ、安心しました」、「ほっとしました」って、ほとんどの人が言うんですね。「ここでは助けてくれるし、これ以上何か危害を加えられることもないだろうし」というふうに本人たちは言うんです。それを聞いたことがあるんです。実際にそういう女性に対する暴力というケースは非常に多いとも聞いています。診療と心のケアを行うと聞いています。やはりプライバシーの確保というのが大きな課題だと思いますので、診療を受けて、そして心のほうもいろいろカウンセリングを受けることができるように対応するということだと思います。ちょっと人権問題というより対応についてお話ししました。

藤﨑
　ありがとうございます。下澤さん、お願いします。

下澤
　私たちは、チッタゴン丘陵でレイプ被害の支援活動をずっとしておりました。ベンガル人たちにレイプされたジュマの女性たちへの支援です。一番重要な手段とメディア

は、司法に訴えるということでした。今回の場合はそれがあまり意味を持たない。今回の調査で聞いてみると、レイプ被害に遭った女性のうち夫を殺された可能性の高い女性も多く、一人の母親になってしまったケースがどうも見受けられるので、レイプ被害に関わらず、まずそういった女性たちで妊婦の方々の具体的な支援が必要かを判断し、最初にアクセスするプロジェクトをするかどうかです。

藤﨑
ありがとうございます。では、下澤さん、最後に現場での物資配布などへの質問がありました。

下澤
NGO の活動が見られなかったのは、おそらく政府が積極的に呼び掛けなかったからだと思います。でも、積極的に働き掛けた NGO は許可を取れていましたので、おそらく全体の空気感なのかなと。行くなとか、やめなさいということは言っていない。ただ、92 年と比べると国際社会にも援助要請を出していないと感じました。援助の物資を配るときに、ああいう車の屋根からばあっとばらまくのは最悪なやり方で、実際に将棋倒しで死者も出たんですね。経験豊かな団体であれば、ちゃんと世帯を回って配給日を伝えて、配給のカードを渡します。その世帯に何人いるかとか、赤い色のカードは火曜日とか、水色のカードは午後と指定して、特に老人や障害を持たれた方を優先して普通は配布を始めていくと。
イスラム教徒である点の配慮は必ず幾つかあります。宗教上の話題について非常にリスペクトを欠かないこととか、女性へのダイレクトなアクセスというのは嫌がられるので親族や男性を通じて言葉をしゃべるとか、あと、もう一個大事なのは、バングラデシュ内のムスリム教徒とちょっと違う習慣があります。例えば女性の服は完全にラカイン州の女性と同じ服を着ており、バングラデシュの女性が身に着けるサリーという服を着ていないんですね。一部土着化した文化も見られるので、「バングラデシュの人と同じなんだ」みたいな思い込みも片方で注意したほうがいいことかなと思います。以上です。

藤﨑
ありがとうございます。NGO が最初は希薄だったということについて私から補足します。この 8 月の状況が起きる前は、バングラデシュ政府はロヒンギャ支援をできる NGO を限定していました。基本的には国際機関、または国際機関のパートナーとなっている比較的大手の NGO か現地の NGO など、たぶん 10 本の指で数えられるぐらいの限られたところにのみにしか支援が許されていませんでした。2017 年 3 月の時点で、シャプラニールで支援をするか検討した際、政府側の許可がおそらく出ないだろうという判断になり諦めたという事情があります。8 月の流入がきっかけとなって、その前からあったと思われる国際 NGO や国際社会からの圧力が高まり、バングラデシュ政府が許可を出し始めたということではないかと推測しています。
ここでパネルディスカッションは終了したいと思います。パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。

大橋
どうもパネリストの皆さん、ありがとうございました。
まとめをすることはできませんが、今回のパネリストのお話を皆さん聞かれて、たぶん現状がどうなっているかということを、多角的に知っていただいたのではないかというふうに思っています。多角的にというのは、ミャンマー、そして、それとラカインの人たちやその州との関係、バングラデシュ、そして国内の政治の問題、さらにそれに加えてインドとか中国といった周辺国との関係の問題、そういった非常に複雑な問題が出てきているし、ミャンマーの軍と現地の少数民族の戦いがどうなっているのかというようなこと、複雑な構造が出来上がって政治的な問題や力関係が混ざり合ってドロドロとした現状が起きています。私は 92 年のときはその発生初日からほとんど関わって

いるのですが、これも広い意味では、もっと整理された形でバングラデシュ政府は難民の対応をしていたので、今日の話を伺って、私はすごくびっくりしていて、あのときは 17 だと思いますけれども、ちゃんとキャンプが、きちんとした統制がとれた対応をしていた。それなのに、今回はそれがすごく遅れたという印象を持っていて非常に驚いています。

しかし、一つ感じたことは、下澤さんや斎藤さんも申されていましたけれども、私もバングラデシュのメディアをずっと毎日モニターしていると、女性に対するレイプの問題があまりにも語られていないかなというふうな気はしています。先ほどご質問になっていましたけれども、セーブ・ザ・チルドレンさんが詳細なレポートをまとめているということです。かなり現地でシステマチックに若い女性たちがレイプをされた、という報道が何度も繰り返されています。そういうことを受けて、アメリカだけですけれども、民族浄化、すなわち男は殺し、女に対してはレイプをして、一つの手段としてそれを使っていくということが組織的に行われたのではないかというのが、バングラデシュ側の新聞を読んでいると印象を持たざるを得ないということがある。これはもう少しちゃんと注目をしていくべきことなのだろうな、というふうに個人的には感じています。

ということで、今回いろいろ感じていただいたと思いますが、今回は現状がどうしてこうなっているんだということを主に語りました。12 月 8 日金曜日に来ていただける方と来ていただけない方がいらっしゃると思いますけれども、じゃ、今後どういうことが考えられるのだろうということを焦点に話し合っていこうと思っています。

それでは、長い間、どうもありがとうございました。

第2回「ロヒンギャの人々の今後の可能性を考える」

下澤嶽
　私は今日総合司会を務めます、聖心女子大学グローバル共生研究所客員研究員の下澤と申します。今日のシンポジウムは、12 月 5 日にありました「ロヒンギャ問題の現状・背景を多角的に見直す」に続くシリーズです。前回のシンポジウムでは、問題の根底にあるさまざまな要因を多角的に見直すというテーマで、パネリストが壇上に上がり、さまざまな視点から整理をいたしました。ロヒンギャ排除をなぜミャンマー国民はここまで根強く持ち続けるのか、そこには他の少数民族との対立を上手に操る軍の知恵があるのではないか、また 2017 年 8 月のテロ行為を行ったグループの背景にあるインドの複雑な状況、そして現場のキャンプ地における支援活動の遅さ、といったことを前回のシンポジウムで多角的に深めてまいりました。
　今日は第 2 部ということで、「ロヒンギャの人々の今後の可能性を考える」と題しまして、この後何をどう設計し、対応できていくのだろうかという、未来像を考え出していくシンポジウムとしてやらせていただきます。今日は全員で 4 名のパネリストの方と、この後、シャプラニールの事務局次長の藤﨑さんに、会場の皆さまと合わせて質問や討議のモデレーターをお願いしております。それでは早速始めていきたいと思います。
最初の報告、UNHCR 駐日事務所代表のダーク・ヘベカーさんから、「ロヒンギャ危機における今後のビジョン」ということでプレゼンテーションをお願いいたします。

Hebecker Dirk　「ロヒンギャ危機における今後のビジョン」
　こんばんは。 My Japanese is very limited so on a topic as complicated as the Rohingya issue I will stick to English, but there is a simultaneous interpreter so if you cannot understand English please put on your headphones. Thank you very much, Professor Ohashi, thank you Sacred Heart. It's always a pleasure to be at Sacred Heart, because this is the 'alma mater' of my first High Commissioner for Refugees - Madam Ogata, who as the Representative of UNHCR here in Tokyo I have the great pleasure to meet quite frequently. Ogata-sensei is 90 years old and enjoys good health, and it's always a big inspiration with every conversation we have had since I came here.

　You may ask yourself why I am invited here as a keynote speaker on the topic of the Rohingya, why the representative of UNHCR here in Japan? I started to work for UNHCR in 1993 and from the beginning of my career I have always been intrigued by the Rohingya situation. That was around the time when we were dealing with a large Rohingya situation in 1992-1993. I was always intrigued by the nature of this crisis, especially the fact that we were not just talking about a refugee situation, but also a situation of statelessness.
　Finally in December 2004, I was appointed as the head of UNHCR's field office in Maungdaw in Northern Rakhine State and I worked there for a little over two years until February 2007. I continued to follow the events in Rakhine State after that and in July 2011, I was appointed as Head of UNHCR's sub-office in Cox's Bazar in Bangladesh. Cox's Bazar is in fact just 50-60 km from Maungdaw, the other side of the border. I worked there for two years and then very recently at the beginning of the latest crisis that started at the end of August 2017, probably because of my previous involvement with the Rohingya, I was asked to support UNHCR's initial response

efforts. As you can imagine, the influx of refugees from the end of August and especially in early September was so overwhelming – within three weeks, 300,000 people had crossed the border.

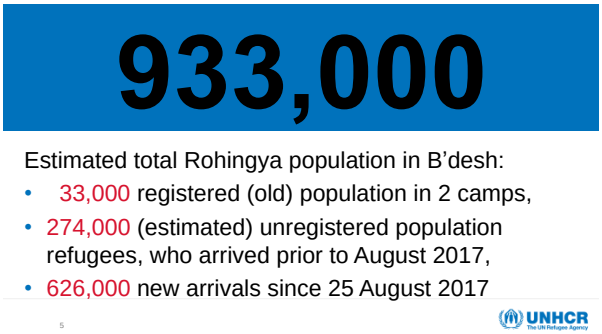
No UN agency, including UNHCR's office or IOM or any other UN office, were adequately prepared to deal with that situation at that moment. So we had to throw in reinforcements including personnel and I was asked to lead the response effort from the capital Dhaka. I undertook several trips to Cox's Bazar and I will talk about this in a moment. In fact just now I met my colleague of that time when I was working in Cox's Bazar from 2011 to 2013 - Shiga-san, who I was just telling that he should really be in Bangladesh now. He's a fluent Bengali speaker, very rare in Japan. He helped us at that time to identify the unregistered or undocumented Rohingya population in Cox's Bazar district and I very warmly remember my collaboration with Shiga-san.

You have seen the pictures of this out flux.

I am showing them again here, because it is very different from many other refugee situations and it is also different from the 1991-'92 situation and also different from the 1978-'79 situation. In my presentation but also in this today's event UNHCR is not only interested in providing its own perspective, in fact tonight pretty much my own personal perspective, but also to listen. I am looking forward to the presentations of the other speakers and to your questions and remarks later. I am also grateful to the organisers for choosing a forward-looking future-oriented topic for tonight's discussion. Although, it may be too early to come to a very clear conclusion, too early in this crisis to come to very clear conclusions and I am also not a prophet to give you any crystal ball vision of what may or may not happen in this crisis in the future. The Secretary General of the United Nations, Antonio Guterres, and also the UN High Commissioner for Refugees, Mr. Filippo Grandi, and many other UN officials, many government officials from different countries have said that the problem of this situation lies in Myanmar and so does the solution. More realistically, I think it will be a very long and hard way to find that solution and to bring about that solution, to implement that solution.

At this very moment we are still struggling very much with the humanitarian response. People arrived in Bangladesh exhausted. It is very hard to understand the geography and the topography you really need to have very good satellite images to see, to picture what this is like, but there are very, very few roads in Northern Rakhine State and most of the logistics are actually by boat using the rivers and the small creeks and the most efficient connection between Northern Rakhine State and Bangladesh is by sea across the Naf River. But not all parts of Northern Rakhine State are directly connected to the Naf River. Many villages, especially in Buthidaung and Rathedaung closer to Central Rakhine are actually disconnected from the Naf river by a mountain range. So many villagers in the absence of any other transportation, there are no buses, there are no trucks or anything that could bring these masses of people across to Bangladesh, most people walked for days if not weeks to reach Bangladesh. You can imagine that there was no food or water or very little of that, people were eating leaves and drinking rainwater, children, elderly, everybody arrived in a precarious state of health, malnourished,

sick with diseases. And on arrival in Bangladesh, there was not much that Bangladesh itself could offer these people. In fact the situation was so dire that Bangladeshi local people in the district where most of these people arrived in the sub-district of Ukhia in Cox's Bazar district, provided from their own personal supplies; food, water, clothes, even materials to construct very simple makeshift shelters to these people.



I talked about the magnitude of the crisis, you probably talked about this already on Tuesday. I am sorry I had to miss this first symposium. What's on this screen is the total of Rohingya people now in Bangladesh because we are talking about an old caseload, we talked about the more recent arrivals before this latest violence and we talk about 626,000 new arrivals since the violence started in Rakhine State on the 25th of August. There are still new arrivals even as we speak. I just read before coming here a very fresh report by The International Crisis Group - ICG. You can look this up under crisis group.org which I think is more pessimistic about the future of this crisis than myself, because the ICG suspects that we may not see the outflow cease anytime soon. It may actually go to the complete emptying of all the Muslim villages and enclaves in Northern Rakhine State before there is an end to the outflow. Luckily Bangladesh is keeping its border open. When I was there in 2012 we had communal violence in Maungdaw and Sittwe which caused the internal displacement of some 140,000 people. At that time Bangladesh had closed its border, so they would not officially allow Rohingya to enter their country. Luckily this is not the case this time, although the magnitude of today's crisis is actually far worse.

What I wanted to say about this is, imagine 840,000 people in total, 626,000 people new arrivals. This is about the size of the population of Washington DC. Washington DC occupies a territory of 177 sq. km. But the area where the Rohingya refugees of the same size of population are cramped in is only 14 sq. km. So less than 10% of where the same number of people live in Washington, D.C.

I can offer a personal perspective on things much more than an institutional position because the institutional position of UNHCR regarding this crisis is quite simple. The humanitarian response needs to meet minimum standards - provide adequate shelter, food, water, healthcare, medication, education, livelihoods and we need to work towards a solution, and the solution can only be repatriation to Myanmar, maybe with few exceptions for whom resettlement or local integration in Bangladesh could also be considered. Looking at actual prospects for the future, we need to look a little bit at the history, the Rohingya issue has always been extremely complex. And not just the Rohingya issue as a whole, but also the history of the previous outfluxes and the two repatriations that took place, and UNHCR was very much "complicit" to it if not a main actor in those two repatriations. These two repatriations were carried out under quite adequate agreements, but with one big flaw and that was that the root cause of the Rohingya issue, the citizenship of the Rohingya, was not resolved before UNHCR and the authorities started cooperating to bring the Rohingya back to their villages.

Let me look at both countries involved here.

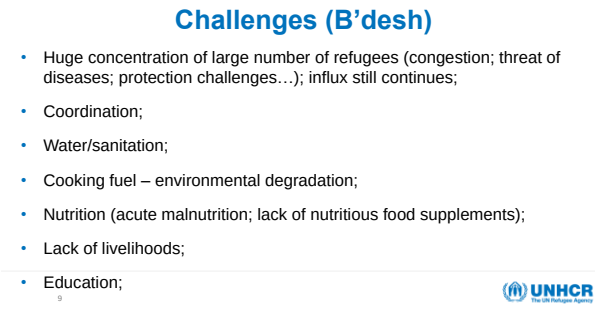
The challenges on the Myanmar side and the challenges are not just in Rakhine State but in Myanmar as a whole are many-fold. Myanmar cannot even agree on the terminology Rohingya, the R-word is prohibited from the vocabulary and as you know even the Pope, when he recently visited Myanmar had to self-censor his language to not use the terminology. The recent situation is the result of decades of discriminatory practices and policies enacted by the country's military rulers as far back as 1962, and which remained largely unchanged in recent years if not aggravated.

In this recent crisis we also saw state-sponsored violence and abuses, going along with very large, if not complete and total support by the non-Rohingya, non-Muslim population of

Myanmar as a whole and especially the Rakhine community, and Rakhine State. In fact many of the atrocities were carried out by the Rakhine militia or the Buddhist militia, some of it even without the support from the security forces. And the actions of the Myanmar military have basically – if you look at the reactions by ordinary people in Myanmar on social media or in the media itself – enjoyed the full support of the Myanmar population. We saw very racist, very anti-Rohingya comments on social media supporting what the military has been doing in Rakhine State. So the nature and the violence and the brutality is something we need to keep in mind when looking at the future. There is uncertainty even about what's happening in Rakhine State now. We don't know if the violence has stopped. International observers are still not permitted there. UNHCR has an office in Maungdaw and we have international staff based in Maungdaw, but they cannot move from the compound. So we don't know, we cannot verify what's happening in the villages. How many of the Muslim population are still left in Rakhine State?

Another problem are the international positions. You are probably familiar with the position of the West and the UN itself, the lack of consensus at the Security Council and at the UN because of China and to a lesser degree Russia and also the position of India. All of this and basically any western pressure pushing Myanmar towards China for collaboration and you saw that Aung San Suu Kyi just carried out a visit to Beijing, meeting with the president and also discussing the Rakhine issue which may mean that any future could fall short of international standards in terms of recognition of the Rohingya people, citizenship, equality and equal opportunities once Rakhine State is developed.

Let's look at Bangladesh. At the moment we are faced there with a huge concentration of a large number of refugees, I gave you the Washington example or comparison. We have huge challenges, they are all listed here: coordination, water and sanitation is one of the gravest problems there. Cooking fuel, I heard some reports saying each day the size of three football fields of wood is chopped off because people need cooking fuel and that is despite the fact that the UN and other partners are actually providing cooking fuel for at least the most vulnerable refugees in the community.



We are also looking at acute nutrition problems, because the food is not sufficient and it is not sufficiently nutritious food. Almost complete lack of livelihoods. You can imagine that 600,000 people in one small district that is in itself poor doesn't provide sufficient work for so many people. Lack of education, we only now start erecting some temporary schools. It will take months if not years to establish a proper school system, at least for primary education, not to talk even about secondary or tertiary education. Huge challenges also in the area of protection. I am sure you talked about this on Tuesday, but especially risks such as sexual and gender-based violence, human trafficking and as we heard also trafficking for organ harvesting.

Funding is an issue. The appeal for US$434 million just for the first six months in an interagency appeal by the main agencies working in this situation is only 38% funded. The 38% if you translate that into what it means for the refugees is that, instead of one blanket per person, we can only provide one blanket for three people. Sometimes it may be cozy to sleep under the same blanket with your loved one, but for refugees this is really hard, day to day struggle for survival.

I think it is really too early to talk about the longer-term future. It is very clear that repatriation is not an option right now. You know that, Myanmar and Bangladesh have signed a

repatriation arrangement. This arrangement has not yet been made public. Unofficially it has been circulated on social media, and you can find it, but officially it has not been shared, despite the fact that in the document there seems to be a reference to a role by UNHCR. But we have asked for the document and we have not received officially the text of the agreement.

Observers believe that this is pretty much something that needed to be done, but for which nobody has a realistic hope that it would actually be implemented anytime soon. This is a big dilemma because on the one hand Bangladesh will have to – for domestic political reasons – need to talk about repatriation. Also for international reasons because Bangladesh will want to keep the pressure on Myanmar, but that also means that Bangladesh will be reluctant to create longer-term conditions for the Rohingya in Bangladesh and we have been through this with the people who were displaced in 1992-'93, who 20 years after that influx were still on humanitarian assistance rather than mainstreamed into the normal life of Bangladesh for largely the same reasons. Resettlement would be another solution, but this is not the time of the sympathy for the Vietnamese boat people of 30 – 35 years ago when almost 1.5 million people were resettled quite easily in the United States and Australia and even in Japan. Nobody, no country will take 600,000 or 900,000 Rohingya just like that.

We know what the protracted refugee situation will mean. It will create tensions on the Bangladeshi side. Bangladesh will have elections in 2018 which, knowing Bangladesh, will definitely carry a certain level of politicization of the refugee issue, and you know the proverb in the Indian Subcontinent: 'when the elephants are fighting, it's the grass that's suffering'. So the Rohingya will have a hard time.

So, is there any hope? There can be four answers to this question; 'yes', 'yes but', 'no' or, 'no but'. And I don't know which answer I am supposed to give you. Yes, there is hope and I have that hope because I have seen in my recent work in Bangladesh that the Rohingya have an extremely high level of resilience with everything they have gone through. As soon as they were more or less stabilized in the camps in Bangladesh, they had already started their new life, with a little bit of trading here and there, somebody was cooking breakfasts to sell it to other refugees, people were engaged in a multitude of activities that you could actually call a life. There is very little hope for repatriation. I personally think it will be very hard for the Rohingya after what they have gone through this time to accept going back unless the conditions are put in place. Citizenship, full access to rights, development of the area and peace between the different ethnic communities. That will require readiness for compromise on both sides and the compromise is usually worked out in dialogue, but at the moment, there is no dialogue even. So when there is no dialogue there can also not be a compromise.

Where I don't see any hope is the deep entrenchment of the divisions. I cannot imagine how even the best intentions and the best development money will erase the racism and the religious prejudice out of the heads of the Rakhine and the Myanmar people against the Rohingya. Engagement will help and that's another hope. We have the Kofi Annan recommendations from the reports of the Rakhine commission. But, and I encourage everybody to actually read the full report - it's only 66 pages -, it has an outline of all the recommendations which you can go through very quickly. But that report as nice as it looks on paper, also means and tells us how hard it will be to actually implement even one or two of these recommendations. Thank you very much.

下澤

ダーク・ヘベカーさん、どうもありがとうございました。

続いて、「バングラデシュの定住の可能性と課題」ということで、ビハール難民の事例を、グローバル共生研究所所長でもあります大橋さんからお願いいたします。

大橋正明 **「バングラデシュでの定住の可能性と課題:ビハール難民の事例から」**

皆さんこんばんは。ようこそおいでくださいました。ありがとうございます。今日、私は、今ヘベカーさんがお話になってくださったように、なかなかロヒンギャ難民の人たちは帰れないだろうという予想に立って、どういうことが起こり得るかということをお話しします。というのは、バングラデシュが独立を達成した 1971 年末に、ビハール難民が生じたんです。これも UNHCR が扱う他国に逃れた難民ではなくて、国境を越えないまま実質上難民になったケースです。その人たちが最終的にどうなったかということから、似たようなことがおそらく 35 年後ぐらいにロヒンギャの人たちにも起こるかもしれないという、一つの予想をお示しすることが今日の私の役割です。

ちなみに私は、91 年末に多くのロヒンギャ人たちがバングシュに入ってきたときは、国際赤十字の一員として現場を担当していました。その人たちの大半は帰国しましたが、しかし万単位の人が残っているという話です。こうした人たちも含めて、少しずつバングラデシュに吸収されていって、最終的には国籍を取るようなことが起きるかもしれないということを予想で申し上げます。

一般的に難民というのは、自分の国に帰ってもらうのが一番いい。ただこれはなかなか起こり得ない。次が近隣国で定住すること。これは文化が近いということで、次に望まれる方法と思っています。実際に今までも、ロヒンギャの難民の人で残っていた人たちは、偽装パスポートを取って出国しようとしたり、実際に国籍をそのまま紛れてしまったという例も時々報告をされています。そういう意味でも、自然に同化していくというプロセスが起きているのだろうと思っています。ただそれは大きな数ではありません。第 3 国定住は、さっきお話ししたようにロヒンギャの人たちは、公式には難民でないわけですから、例外的なものは除いてですけれども、起こり得ないと思っています。

注目しておいたほうがいいのは、バングラデシュ政府は、この前 7 万人、10 万人とも言っているのですが、ベンガル湾のある島にロヒンギャの人たちを送り出すと言っています。私とか前回の発表の日下部さんが非常に関係が深いノアカリ県のハティア島というところの近くの、バシャンチャール島です。ベンガル語では、チョールのほうが正しい発音です。実はバングラデシュ政府は、去年からその計画を発表していて、17 年の 9 月以降に新たに多くのロヒンギャ難民が来る前に、以前から残っていたロヒンギャの人たちを移すと言っていたのです。ご存じのとおりコックスバザールは観光地ですので、そこにいる難民をどけたいという希望だったのだろうと思います。だけれども、その島は Google Map で見ても見つからない。たぶんここ（図参照）だろうと思います。ハティア島の北東向かい当りが、ちょっとだけ堆積で盛り上がってきていて、水面から 1 メートルぐらい上のところになったと思うんです。だけれども、地図上は島としてはまだ十分認識されていない。バングラデシュの報道にも、「バシャンチョール島はどこだ」というタイトルの記事もありますから、非常に新しいところなのです。その陸側にたぶん軍隊の駐屯地があって、人の往来が自由にならないところだとも言われています。ここに移すと言っているのです。

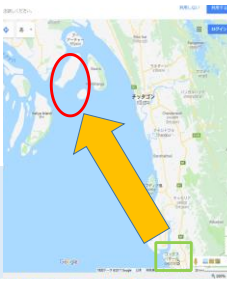
バングラ政府、ロヒンギャ難民移送を計画10万人を無人島へ（2017年12月1日05時00分、朝日新聞）:昨年ハティア島のNGO関係者が語っていた話

- バングラデシュ政府は28日、ミャンマーから逃れてきて国境地帯で避難生活を送るイスラム教徒ロヒンギャの難民を、ガンジス川河口の無人島に移住させるための予算案を決めた。この無人島はサイクロンや豪雨に見舞われることが多く、「人が住める場所ではない」との批判がある。
- 移送先は、首都ダッカの約160キロ南にあるバシャンチャール島。難民の無人島移送計画は、8月末に始まった今回の60万人超のロヒンギャ難民流入の前から、過去の迫害を逃れてバングラデシュ側に暮らしてきた難民を念頭に政府内で検討されてきた。
- 地元紙によると、政府高官は約10万人を移送する方針を示した。12月から島で住居や道路、水道などの整備を始め、移送は来年5月ごろに始めたい考えだという。（ダッカ＝奈良部健）

Dhaka Tribune Oct., 2017

The Bangladesh government has decided to rehabilitate these Rohingya in a new purpose-built camp to be built on Bhashan Char, a remote island under Hatiya upazila in Noakhali.

The Navy has recently been given the responsibility to develop 13,000 acres of land on Bhasan Char to create temporary accommodation for up to 70,000 Rohingya refugees within the next two years



この島の面積は 1 万 3,000 エーカーで、移住人口が 7 万人という報道がありますので、これらから計算すると 1 平米あたり人口密度が 1,300 人です。隣のハティアが 300 人ですから、今のキャンプよりはいいかもしれないけれども、ほとんど余裕がない状況に詰め込まれる、と思っています。大変ひどい状態になると思っています。

さて私の本題のビハール人というのは、インドとパキスタンが 1947 年に分離独立したときに、

インドのビハール辺りから以東のイスラーム教徒の多くが、東パキスタン、つまり今のバングラデシュに移動し、逆にそこ以西のイスラーム教徒の人たちの多くは西パキスタン、今のパキスタン側へ移ってきたわけです。反対に、当時東パキスタンと西パキスタンにいたヒンドゥー教徒の人たちが東西から真ん中のインドに移動します。それぞれがすれ違う時に、互いに衝突して殺し合いもあった。また相手側に殺されるよりはと言って、自分の家族に手をかけるという例がありました。『沈黙の向こう側』という明石書店から出ているウルワシー・ブターリアの本が、非常によくそれを語っていますので、もし関心をお持ちになったらその本を読んでいただくと、語られてこなかった歴史に触れることができます。

前提の基礎知識

- 1947年、インド・パキスタンの分離独立
- インド在住のイスラーム教徒の東西パキスタンへの移動とその逆（自分達自身及び互いの殺りく、参考「沈黙の向こう側」U.ブタリア著、明石書店）
- 東パキスタン（現在のバングラデシュ）の人たちはベンガル語を使用。アジアで初のノーベル賞（文学賞）受賞者タゴールもベンガル語で執筆。
- パキスタン国語はウルドゥー語。元はインド亜大陸のイスーラム教徒no
- 共通語。
- 東パキスタンのベンガル人はパキスタンの国民の半数だが、国語/公用語にならず⇒公用語化要求運動(⇨独立運動)
- ビハール人は必ずしもビハール州出身でなく、イスラーム教徒のウルドゥー語話者、あるいは非ベンガル人を指すことも。

4

バングラデシュの大半の人たちはベンガル語が母語です。一方インドのビハール州辺りからきた 100 万人か 150 万人ぐらいの人たちは、ウルドゥー語が母語です。ウルドゥー語を唯一の国語とした当初のパキスタン政府にとってみれば、ウルドゥー語を喋るビハール人たちは非常に扱いやすい人たちだったわけです。だけれども、当時の東パキスタン、今のバングラデシュの人たちはベンガル語をしゃべるので、ベンガル語を公用語にしてほしいという運動を起こし、それが最終的には独立運動につながっていきました。「ビハール人」と呼ばれた人たちというのは、ビハール州から来たとは限らない。というのは、インドにいるイスラム教徒のほとんどはウルドゥー語をしゃべっていたからです。その人たちはインドで全ての財産を失って移住してきたわけですが、比較的教育熱心な人が多かったので、バングラデシュでは下級か中級以上の役人や兵士、あるいはビジネスマンとかになります。言ってしまえば、その多くのビハール人たちがベンガル人によるバングラデシュの独立運動を弾圧する先頭に立たされた、という歴史があります。
ビハール難民本人が書いた「Invisible Lines」(Ms. Ruby Zaman)が出ていて、自分たちはそれなりに豊かな暮らしをしていた。そしてバングラデシュの独立を自分も望んでいたのだけれども、彼女自身が、独立した途端に新しい国内で難民化してしまったということをお書きになっていらっしゃいます。

いずれにせよ、ビハール人はバングラデシュの民衆からはすごい憎しみの対象になって、何人かのビハール人は襲撃されたのですけれども、多くが難民キャンプに逃げ込んで救出をされました。全国に数十カ所あったキャンプですが、一番大きいのがダッカにあった国際赤十字が作ったジュネーブキャンプです。これ（上段左）がたぶんそのときの写真だと思います。

首都ダッカ市モハマドプール地区にある大規模な、しかし劣悪状況のビハール人キャンプ（ジュネーブキャンプ）
出典：一枚を除いてhttps://www.google.co.jp/search?q=Bihari+camp+photo&tbm=isch&source=iu&ictx=1&fir=B_DAREDWg7cF1M%253A%252CmXUFMJeI3hPU3M%252C_&usg=__EvZ07mTD-t2xAUCbPzae4OBm7zw%3D&sa=X&ved=0ahUKEwjj5oGUxO3XAhVBW7wKHcdeDSwQ9QEIKTAA#imgrc=_

パキスタン政府は、ビハール人は自分の地域から行った人じゃないので、パキスタン政府の公務員だった人は受け入れるけれども、他の人たちは受け入れないということになりました。

これ（上段中央）は数年前のモハメドプールの大規模なキャンプです。ここの人口密度も相当高いものがあります。これ（上段左）が入り口のところで、ジュネーブキャンプで、パキスタンに帰りたいということを示していて、こんな状態で非常に混んでいる感じです。これ（下段左）は私が前に務めていた恵泉女学園大学の学生たちが、このキャンプに暮らすビハール難民のあるお宅を訪れたたときの写真です。多くはこういう刺しゅう（下段中央）の仕事をしたりしていましたけれども、トイレとか水とかが非常に不衛生状況で、猛暑のときには何人ものの人がそのせいで死んでいたということもあります。

彼らは自分たちを、「母国パキスタンに帰れないパキスタン人」と表現だとしていて、当時の国際赤十字は 53 万人ほど残っている、と発表しました。パキスタン政府は十何万人ぐらいは自国に引き取り、さらに 10 万人ぐらいは自分たちでパキスタンに戻ってパキスタン国籍を取得しました。それでも 20～30 万人の人たちが、バングラデシュに残っていたわけです。そのうちの 15 万人が、バングラデシュ政府が開設した 115 カ所のキャンプに出入りしていましたが。キャンプといっても閉ざされた空間ではないので、外に出ていろんな仕事をしてやっていました。仕事は、自分で小さな店を開いたり、床屋とか力車引きとかです。それからお針子さん。東パキスタン時代は豊かな生活をしていたのに、非常に貧しい生活をしたという感じになります。

この人たちがその後どうなったかというと、2003 年に 10 人のビハールの人たちが、バングラデシュ生まれなので、その土地に生まれたものは国籍をもらえるというバングラデシュの国籍法に基づいて、国籍を求める裁判を起こしました。この訴えに対して、ビハールキャンプ、要するにパキスタンに帰りたいというキャンプに住んでいるからという理由で国籍を与えないのは駄目だ、という判決を最高裁が出したのです。これは画期的な判決で、少なくとも 10 人は国籍がもらえました。いろんな政治的な事情もあるのですけれども、最終的に 2008 年に最高裁が、総選挙の前に、ビハール人の大半に国籍を与えるべきであると。もちろん選挙の前ですからいろんな思惑があったんだろうと思うんですけれども、国籍を得ることができました。国連では、80%が国籍をもらっただろうと推定をしています。彼らは長い間キャンプにいましたから、家ではウルドゥー語をしゃべっていましたけれども、外ではベンガル語をしゃべっているので、普通見た目には全然区別はつかないです。私は両方しゃべるものですから、いろんなお話しができました。

なぜ残りの 20%のビハール人が国籍を取らないかというと、もしかしたらバングラデシュ生まれじゃない人もいるかもしれない。また彼らが要求しているのは、自分たちの奪われた財産を。保証しろとか、キャンプに住む居住権を保障しろということを今要求している最中で、そういう裁判なんかを起こしていますので。しかし、これ以降キャンプがどんどん複数階の建物が建っていって、そこで居住状況を改善しているという状態になっています。

これ（表：ビハール難民とロヒンギャ難民の比較）を見ていただくと、ビハール人とロヒンギャ人の違いは、元々教育程度の高い人と低いという人たちが一番違うかなという感じです。昔のビハール人の人たちは比較的教育程度の高い人たち、ロヒンギャの人たちは比較的教育程度がそんなにない、どちらかというと貧しい人たちというところがあります。繰り返しになりますが、ロヒンギャの帰還はゆっくり進むかもしれませんけれども、下手したらその数は 1 日僅か 100 人とも予想されています。

ビハール難民とロヒンギャ難民の比較

	ビハール人	ロヒンギャ難民
当初国籍	無国籍	無国籍
宗教	イスラーム教	イスラーム教
当初希望	パキスタン帰国	安全保障された帰国？BD定住？
言語	ウルドゥー語	ベンガル語チッタゴン方言に近いロヒンギャ語
当初教育	教育程度高い人が多い	多くが低学歴もしくは非識字
以前職業	官僚、実業家、兵士や警官など	農民

ビルマの国籍が確認できるというのは 1 万人しかいない、という予想もあります。ですからほとんどの人たちがバングラデシュに残っていくだろう。

一方でこのバシャンチョール島の移住は、難しいことになるだろう。ただバングラデシュの経済は実は成長しているので、一部の地域では労働力不足が起きていて、労賃の高騰が起きたりするので、もしかしたらそういうところに低賃金労働者として吸収されていく可能性があるんじゃないか。そのときにロヒンギャの人たちの人権がどう守られるかというのは、また次のチャレンジとして起きるんじゃないかと感じております。以上です。ありがとうございました。

下澤

大橋先生、どうもありがとうございました。それでは続けて 3 人目、無国籍という視点から問題提起をいただきます、聖心女子大学グローバル共生研究所の客員研究員でもあります加藤丈太郎さん、よろしくお願いします。

加藤丈太郎 **「無国籍という問題」**

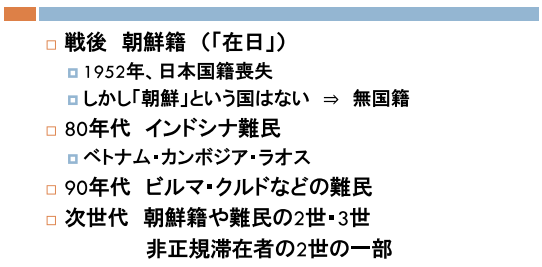
皆さま、こんばんは。私は加藤丈太郎と申します。早稲田大学の大学院から参りまして、聖心女子大で客員研究員を務めております。今日はロヒンギャという問題を無国籍という視点から少し考えてみたいと思います。

そもそも国籍がどういうものか少し見ておきたいと思います。国籍とは個人が特定の国家の構成員である資格。人を特定の国家に属せしめる法的紐帯（ちゅうたい）と言われます。また無国籍とはどういうことかと言いますと、無国籍者の地位に関する条約 1 条によると、その国の法律の適用により、いずれの国によっても国民と認められないものとされます。無国籍がどういう状態なのかということを日本の状況に引きつけて少し考えてみたいと思います。

私はこれまで日本国内の NGO で、非正規滞在、すなわち在留資格のない外国人たちの支援に従事してまいりました。実際に支援をする中で、無国籍状態になっている方も複数おられました。その経験を振り返りながら考えたいと思います。例えば無国籍状態の方と役所に行きます。すると言われるのが、「パスポート見せてください、パスポート、え、ないの？」ということです。本国法の特定および適用を受ける行政手続きをする場合、例えば結婚してないけれども子どもが生まれて認知をしたい、結婚をしたい、国籍はないけれどもその国に長く住んでいるからその国に帰化をしたい。いずれのような手続きのときにもまず求められるのがパスポートです。

しかし、無国籍の方はパスポートを所持していませんので、仮に他の国に移ったときにいろいろと支障が出てくることが想定されます。ロヒンギャの方も、他国に逃れたとしても、多くの方は在留資格がない状態に置かれることが想定されます。日本の状況に引きつけて考えますと、在留カードというものを外国人の方は持っています。

無国籍でかつ非正規滞在である方は、それも持つことが日本ではできません。すなわち、ここにいるけれども住所がないという状態が生まれます。仮にロヒンギャの無国籍でかつ非正規滞在である方が日本にいたら、以下の状況が想定されます。健康保険に加入できないです。児童手当を受給することができません。生活保護はもっての外です。住居地が決まっていないので、例えば東京都内にお住まいであって、東京都の高等学校に進学したいという場合でも、ここにいるけれども住居地がないから進学できないということが想定されます。ここに示しているのが、日本国内にこういった属性の無国籍の方がいるということを紹介しているものです。詳しくはご参照ください。



ロヒンギャと聞きますと、遠い海外の問題のようにも聞こえるのですが、日本にも存在しています。群馬県の館林市は聖心女子大学からですと電車で 2～3 時間かかるところですが、コミュニティを形成しています。約 250 人のロヒンギャが日本で暮らしていると言われておりまして、内 200 人が館林市に集中をしています。5 日の渡邊先生の報告にもありましたが、そのうち難民認定を受けている方が 15 ないし 20 名程度、難民とは認められなかったけれども日本での在留許可を得た方が 50 人、仮放免といって在留資格がない、しかし入国管理局に収容されていないという方が 11 名、それ以外の方はいまだに難民認定申請のプロセス中であると言われています。家族連れのロヒンギャも存在します。中学校もムスリムのお祈りの部屋を設けるといった工夫もしています。職業としては、工場勤務ないしは中古車の販売などに従事しています。

陸続きの、日本以外の国に逃れるということがより現実的だと思うのですが、日本にも来るわけです。しかし、無国籍でどうやって入国できるのでしょうか。旅券がそもそもないわけです。しかし他国に入りたい。そうなると、ブローカー等に頼んで偽造旅券を使う場合もあると思います。他国に逃れたとしても、その国で非正規滞在になってしまうということが想定されます。バングラデシュ、タイ、マレーシアなどに今ロヒンギャはいます。難民条約は無国籍の方も対象としていますけれども、バングラデシュなどは難民条約には加入していません。
移住労働者の条約にもいずれの国も批准をしていません。ですので、無国籍という状態で他国に行ったときに、どのような扱いをされるのか推して知るべしというところだと思います。

2017 年 11 月に、東京国際映画祭でロヒンギャについての映画が上映をされました。マレーシア人の監督が企画をされた「アケラット―ロヒンギャの祈り」という映画ですが、マレーシアにおける華僑系、つまり中華系の方がなかなかマレーシアでの暮らしに展望が見えていかない、そしてブローカーのビジネスに手を染めていくという話でありましたけれども、ロヒンギャは映画でも注目をされてきています。

後半、ミャンマーの話を少ししたいと思います。ロヒンギャはミャンマーで民族として認められていません。ミャンマーの 1948 年国籍法、1982 年の国籍法においても、ロヒンギャは、ミャンマーが国民として認める民族として認められていない。したがって国籍もないという状態が続いています。しかし世界人権宣言の 2 条は、人種・皮膚の色等々にかかわらず、差別を受けることなく全ての権利と自由を享有することができるとうたっています。これを鑑みるに、無国籍という問題を解決していく必要があります。解決のためには、一つは国際条約にミャンマーが加盟をしていくこと。もう一つに、国籍法の改正をミャンマーがすることが必要だと思います。ヘベカーさんの報告にもありましたが、ラカイン問題検討諮問委員会について少しご紹介をしたいと思います。

アウンサンスーチーさんが、国連の事務総長も務められたコフィー・アナンさんを委員長にしまして、このようなメンバー構成で 1 年間にわたって検討がなされました。アナン委員長は国際社会の人だと誰でも思うような方です。そのような第三者に調査をしてもらって結果を示すことによって、現状を打破していきたい。すなわち国際社会がこう言っているのだということを、もしかしたらスーチーさんは、軍であり、仏教徒に示そうとしていると考えられます。報告書はウェブ（http://www.rakhinecommission.org/the-final-report/）で簡単に入手することができます。アウンサンスーチーさんは、政府全体で勧告を批准する枠組みを作ると答えたそうです。

ラカイン問題検討諮問委員会

- 2016年8月結成
- 9人の委員のうち3人が外国人、ムスリム2名（ロヒンギャではない）が含まれるというメンバー構成。（委員長・コフィ・アナン）
- アナン委員長に象徴される国際社会の眼もいれた第三者委員会に調査してもらい、見解を示してもらうことによって、現状の打破（to軍・仏教徒）を狙ったものと考えられる。

ラカイン問題検討諮問委員会 最終報告書

- Myanmar harbours the largest community of stateless people in the world, and the Commission was specifically mandated to explore this issue and provide recommendations related to citizenship and documentation and propose actions to clarify questions of citizenship. (p.26)

報告書の一部を抜粋していますが、報告書によると、ミャンマーは無国籍の方を最も多く有する国であると書かれています。ミャンマーへの勧告としては、市民権を認められた者が、利益、権利、自由を行使できるようにすること。市民権認証の過程への明確な戦略、タイムラインを作ること。申請が仮に認められなかった場合でも、どのような地位を与えるのか明確化すること、地位を与えること、過程を自発的にやっていくこと、市民権を認証するために独立した政府機関を作るべきこと、そして 82 年の国籍法について、国際基準、規範にのっとっていないので、見直しをすべきであるということを言っています。国民、準国民、帰化国民といった分類を撤廃する。市民権とエスニシティ（民族性）というのが深く結びついているわけですが、その見直しをすべきだということも言っています。

しかし複数の報告者からすでに上げられているとおり、コフィー・アナンの報告書が出たのと同日、アラカン・ロヒンギャ救世軍による警察や軍施設への襲撃が事件として起きました。一説に

は、2017 年 10 月には軍の部隊が複数のロヒンギャの村を焼き払って、民間人に対して殺害や強姦を行ったという疑惑も出てきています。ですので、報告書が出てきたというところですが、なかなか現状は厳しいものがあります。以上で私の発表としたいと思います。

下澤
　加藤さん、どうもありがとうございました。最後の発表になります、「ロヒンギャ問題をビルマ側から見ると～排他的ナショナリズムの構造と実態」、上智大学総合グローバル学部教授の根本先生、よろしくお願いします。

根本敬　**「ロヒンギャ問題をビルマ(ミャンマー)側から見ると～排他的ナショナリズムの構造と実態」**
　皆さん、こんばんは。上智大学の根本敬でございます。
　私の題名ですが、「ロヒンギャ問題をビルマ側から見ると」であります。これは決してビルマの肩を持とうという話ではありません。断じてそういう話ではないんですが、現在のビルマになぜあのような排他的なナショナリズムが存在するのか、それを歴史的に振り返って整理してみるというのが今日の私の話の骨子であります。ロヒンギャという民族の歴史的な形成過程は、3 つの堆積構造プラス 1 という形で考えると分かりやすいと思います。

1　ロヒンギャの歴史的形成過程―3 つの堆積構造＋1

第 1 層　アラカン王国（ムラウー朝 1430-1785）時代のムスリム
第 2 層　英領化されたラカイン（アラカン）に流入したベンガル系移民（⇒定住）
（1826 年～1941 年前後）
第 3 層　第 2 次世界大戦後の混乱期に流入したベンガル系移民（⇒定住）

（当日配布のレジュメより抜粋）

　まず第 1 層として、アラカン王国の時代のムスリムがいます。アラカン王国は仏教の王朝です。しかし、最初の王から 30 代目ぐらいまで王がいたのですが、初代から 11 代目までの王は、隣のベンガルと貿易をするときにムスリムの名前を名乗っていました。したがって非常に柔軟な宗教的アイデンティティを有していたと言えます。実際に王宮の中にもムスリムが役職を持って住んでいました。また、王国内には元捕虜であったり、商人としてアラカン王国を訪問したムスリムが平和裏に共存していました。仏教徒だ、ムスリムだ、ということで対立したという記録は残されていません。ただ、王国時代の後半になると、仏教を強調する文脈が王のほうから出てきます。しかし、それ以前は仏教であれイスラムであれ柔軟に対応し、王国として宗教的に上手に適応していたと言えます。したがって、この時代のムスリムの末裔が現在のラカイン州にいるということをまずご理解ください。
　次にその第 1 層に乗っかる形の第 2 層がいます。これは英領化されたラカインに入ってきたベンガル系の移民です。1826 年に第 1 回目のイギリスのビルマ侵略戦争が終わり、ラカイン地方、すなわちアラカンはイギリスの植民地となります。隣の英領化されたインドの一部に組み込まれるわけです。したがって、ベンガルの人たちが国内移動という形でラカインに入ってきます。この人たちはその後、定住します。この定住をレジュメで矢印をつけて強調した理由は、実は百数十年にわたるイギリスのビルマ植民地支配期において、多くのインド人が移民として入ってきますが、その大半は 3 年から 4 年、ないしは 5 年程度の短期の出稼ぎ移民でした。したがってそのまま定住するということはあまりなかったのですが、ベンガルからラカインに入ってきた人たちは例外的でした。この人たちは 3 世代、4 世代と続いて、ラカインの北西部に定住するようになります。
　当時の植民地政府の統計では、彼らはチッタゴン人（英語でチッタゴニアンズ）という名前で分類されています。ときにはムスリム人、モハメディアンという表記でも書かれていました。この人たちの数は相当な人数に上ります。おそらく数十万という規模に上ります。これが第 2 層です。
　それに乗っかる形で第 3 層がいます。こちらは第二次世界大戦後の混乱期に入ってきたベンガル系の移民で、この人たちも定住し、今では 3 世代、4 世代目を迎えています。ビルマ独立前年の

1947 年に憲法制定議会議員選挙というのがありましたが、そのとき、後にロヒンギャを名乗ることになるムスリム 2 名が当選し、この憲法の制定の原案を作る委員会の委員にもなっています。ですから独立直前のビルマでは、ムスリムも参加して最初の憲法を作ったと言えます。

しかし、一方で独立直後の混乱期でもありましたから、一部で武装闘争が始まり、独立後のビルマ中央政府の力が及ばなかったこともあり、さまざまな不安定な状況がラカイン西北部では続きます。このころ、1950 年ですが、初めてロヒンギャという名前が記載された文書が出回るようになります。歴史研究の課題として、ロヒンギャという名前がどこまでさかのぼれるかという議論がありますが、文書史料では 1950 年までであります。独立ビルマの初代首相ウー・ヌがラカインを訪問したとき、歓迎したムスリムたちが「私たちロヒンギャ兄弟団は」という言い方でロヒンギャという名称を使っています。それよりもさらに昔にさかのぼれるかどうか、それは分かりません。少なくとも書かれた形では 1950 年までロヒンギャの名称使用はさかのぼることができるということです。

先ほど申し上げた、当選した 2 名のムスリムはロヒンギャを名乗り始めます。この人たちが中心となって当時の首都ラングーンの中央政府の議会において、多数派のラカイン人にいじめられたくないので、ラングーンの中央政府が直接統治する形の区域を作ってほしいという要求を示すようになります。中央政府が直轄統治するロヒンギャ居住区域を作ってくれという希望です。ロヒンギャが数多く住んでいるところは、マユという地名が付いています。ですからマユ特別区とも言います。この直轄当地案はほぼ実現するところまで話が進んだのですが、1962 年 3 月に軍事クーデターが起きて、ウー・ヌ政府が倒れてしまいました。その後登場した軍人の政府は、ビルマ式社会主義という新しい体制を作りましたが、マユ特別区の話は吹っ飛んでしまいました。この時期でもう一つ忘れてはいけないのは、短期間ではありましたが、1950 年代の終わりから 63 年までのあいだ、2 週間に 1 回だけ 2 時間、ビルマ国営短波放送でロヒンギャ語による放送が認められていたという事実です。これも興味深い事であります。

したがいまして、ここまでの経緯を復習しますと、第 1 層、2 層、3 層と形成されて、これらが重なり合い、何らかの形で混ざって、その一部がロヒンギャという名乗りを上げたのだと推定できます。

しかしプラス 1 というのがあります。これは私自身、なかなか気付くことができず、これまで書いてきた本や論考では全く触れなかったのですが、広島修道大学の高田峰夫先生のアドバイスを受けまして、最近はこのプラス 1 が大事なのだということを認識しております。

このプラス 1 というのは、は第 3 次インド・パキスタン戦争、印パ戦争のことです。1971 年、私は当時、中学 2 年生でしたから非常に明確に覚えておりますが、バングラデシュ独立がイシューとなった第 3 次インド・パキスタン戦争のときに、ベンガル地方、現在のバングラデシュに当たる地域が不安定になり、多くの人間がビルマのラカイン州に入ってきました。実はこのときの流入移民の記憶が、現在のビルマ国民のロヒンギャという民族は存在せず、バングラデシュから入ってきた不法移民なのだというイメージ形成を決定づけたとみなすことができます。

なぜビルマの国民は宗教・民族を問わずロヒンギャの存在を認めないのでしょうか。「宗教・民族を問わず存在を認めない」という私の言い方に疑問を抱く方もいるかもしれません。例えばロヒンギャ以外のムスリムはビルマに人口の 5%近くいます。その人たちの多くも、実はロヒンギャは自分たちの仲間ではないと言います。また、ヒンドゥー教徒やキリスト教徒も、ロヒンギャに対しては批判的な語り方をする人が少なくありません。ですから「宗教を問わず」なのです。また土着の民族として国家に正式に認められている 135 の民族に属する人たちは、我々 135 民族以外はビルマの土着ではないと語ります。個別の審査で例外的に国籍を認めてあげるのだと、そういう考え方を持っています。そういう人たちは、ロヒンギャはバングラデシュからの不法移民だから国籍を与えてはならない、そもそも民族を名乗るということ自体がけしからんと声高に言います。

なぜそういうふうに考えるのでしょうか。日本を含む海外のメディアは「ロヒンギャがムスリムだから」ということを強調します。しかし、それは理由の one of them に過ぎません。決して最大の理由ではありません。なぜならば、ビルマには先ほど申し上げたように、ロヒンギャ以外にもム

スリムがたくさんいるからです。人口の 5%ぐらいいるからです。その人たちは必ずしも公平に扱われているとは申しませんが、ロヒンギャのように極度にいじめられたり、国から出ていけと言われたり、おまえらは国民ではないなどと言われることはめったにありません。大都会のヤンゴンではムスリムが多く住んでいる居住区がいくつかあります。そこの人たちは仏教徒とも平和的に日常生活を送っていますし、モスクもありますし、モスクが嫌がらせを受けることはないわけではありませんが、日常的には平和裏に宗教的な建造物として存在しています。ですから、ロヒンギャがムスリムだからいじめられ、国から追放されているのだと、単純にはお考えにならないでください。

ビルマ国民の多くがロヒンギャを排斥する 2 つ目の理由は、彼らが人種的に土着の人々と違うからというものです。これは法的な問題を言っているのではなく、人種差別という意味で言っています。ロヒンギャの人たちは肌の色が黒いとビルマ国民の多くはみなしています。ビルマの人たちは、自分たちの肌は白いという誇りを持っています。私たち日本人から見ればちょっと違うような気もしますが、一般のビルマ国民は民族を問わず、自分たちの肌は白いと認識しています。

ロヒンギャは肌が黒いという認識から差別意識が生まれます。また一般ビルマ人と比べて顔の彫りが深いという特徴がロヒンギャにはあるため、これも異質性を強調する材料となり、差別意識を助長しています。さらに加えて、使っている言葉がビルマ語ではなくロヒンギャ語であり、ビルマ語を使ったとしても「なまっている」ため、そういうところからも人種偏見が生まれます。これがもととなって、彼らは間違いなく不法移民集団なのだという差別意識が生まれます。しかし、人種偏見そのものは、地球上どこに住んでいる人も、大なり小なり抱きます。ですから、なにもビルマ国民だけが特別に人種偏見を抱きやすい人々だということではありません。ここも誤解を抱かないようにしていただきたいと願います。

ロヒンギャを排斥する 3 つ目、実はこれが最大の理由だといえます。彼らが、つまりロヒンギャがミャンマー連邦の土着民族ではないからという理由です。ベンガルからの不法移民だからという認識です。バングラデシュから入ってきた連中で、本来は出ていくべきなのにラカインに居座っているから困った連中であるという見方です。これが最大の理由で、一般のビルマ国内で時々発生するムスリム差別と、ロヒンギャに対する国外追放を含む強度の圧迫は、混同しないほうがよろしいと思います。それではなぜ「土着民族ではないから」という理由が最大の理由になるのでしょうか。土着民族などという言い方は、私たち日本人はほとんど考えませんよね。しかし、ミャンマー連邦に住む人たちは、ほぼ日常的に考えています。土着民族はビルマ語では、タインインダー・ルーミョウと言います。これは日常の会話でも出てくるような単語です。学歴と関係なく、人々はこのことをいつも考えています。そのとき、そこにロヒンギャは含まれていません。

1982 年に施行された現行の国籍法、先ほど紹介がありましたように、第 1 次英緬戦争開始前年の 1823 年以前から住んでいる人たちに、正規の国籍が与えられると定めています。とは言っても、「自分の先祖は 1823 年以前から住んでいます」と証明できる人はいませんので、そこは弁法として、自動的に国が決めた 135 種類の民族を土着民族、ビルマ語で言うタインインダー・ルーミョウという名称でくくって、この人たちだけが、イギリスが入ってくる前からミャンマー連邦の土地に住んでいた土着の人々だとみなしています。だからこの人たちは国籍を自動的に持てるわけです。多数派のビルマ民族、それに加えて、シャン・カレン・カチン・ラカイン・モン・チン・カヤー、そういった諸民族を全部合わせて 135 の土着民族リストが作られています。この人たち以外は、個別審査を受けないと国籍はもらえません。個別審査を受けても、土着ではないのでレベルの低い国籍が与えられます。「準国民」「帰化国民」という枠です。時々土着民族でなくても正規の国籍が与えられますが、多くの場合「準国民」「帰化国民」ないしは「外国人」に分類されます。ロヒンギャは言うまでもなく外国人扱いになりました。

以上は法律の話にすぎないのですが、ミャンマーの場合、1823 年以前から住んでいる人間だけが土着民族だという法の規定を、人々がほぼ例外なく、インテリもリベラル派も含めて、信仰のように思い込んでいるところに特徴があります。1824 年にイギリス軍が侵略してきた。それをきっかけに、外からおかしなのがいっぱい入ってきたと信じ切っているのです。インド系、アフガン系、ペルシャ系、中国系、そのほかいろいろ入ってきて、適当にビルマに居着いてしまい、独立したとき

に国籍をくれと騒いだのだと考えています。そうした人々のせいで我が国はゴタゴタしてきたのだと解釈しています。本当のビルマ国民は、1823 年以前から住んでいる人々に限定されるとみんな疑わずに信じ込んでいるわけです。それはなぜでしょうか。

この考え方はイギリス植民地期のナショナリズム運動、独立運動の中で出てきたものです。独立運動の中で、誰がビルマ国民か、独立した後の国民はどのように定義すべきかという議論が生じたときに、イギリスの 1 回目の侵略が始まる前から住んでいた人たちの子孫が我々の仲間であるという考え方が生まれ、それが強調され、独立後にはその考え方が国是のように確定するに至ります。さらに付け加えれば、イギリス植民地政府が、ビルマが独立する 10 年ほど前からこのような考え方に最後お墨付きを与えていたことも知っておく必要があります。1939 年、日本軍が入ってくる 2 年前ぐらいの段階ですが、イギリス人のビルマ総督は、ビルマ人のナショナリズムをコントロールする中で、1823 年からいる人たちがビルマ国民の中心だという主張を受け入れます。そして「最終的に誰がビルマ人であるか、誰がビルマ国民であるか、誰が国籍を持てるかは、ビルマ人が決めることである」と総督がお墨付きを与えます。

そういうことがありましたから、独立後、1823 年の幻想、あえて幻想と申し上げますが、これが独立後のビルマの事実上の国是になるわけです。これに疑問を抱くビルマ人はまずいません。はっきり言って私は出会ったことがありません例外はアウンサンスーチーさんただ一人だと思います。もう一人、イギリスで学位を取ったビルマ人の有名な歴史家がいます。タン・ミン・ウーさんという方ですが、その 2 人ぐらいですかね、私が出会ったビルマ人で 1823 年の幻想を信じていない人は。私のビルマ人の友人たちに「1823 年という基準はおかしいのでは？」ということを言えば、「根本、おまえのほうがおかしい」と言い返されてしまいます。学歴は関係なく、保守派もリベラルも同じことを言います。

最後になりますが、私たちはこの問題をどう解決したらいいのでしょうか。国際社会はアウンサンスーチー非難に傾いていますけれども、それは生産的ではありません。実はアウンサンスーチーだけが、ビルマ国内ではロヒンギャ問題の解決に本腰入れているという現実があります。国際社会から見れば、ロヒンギャ問題に関する姿勢において、彼女も軍も同じように見えます。彼女は軍におもねっているのではないか、世論が反ロヒンギャだから彼女も何もしていないのではないかと受け止めるわけです。ノーベル平和賞を取っていながら、なんでこんなに悪い方向に彼女は変化してしまったのだと、そういうふうに国際社会には映っているようですが、現実を冷静に見た場合、そんなことはないのです。

今のビルマ国内の圧倒的多数の世論はロヒンギャ排斥であり、軍はもっと強い排斥姿勢を有しています。そういう中で彼女の立ち位置は、この問題を前向きに解決したいという姿勢がはっきり示されています。コフィー・アナンの委員会を作ったのは誰でしょうか。アウンサンスーチーです。2016 年 8 月にこの諮問委員会を作ったのは彼女だったのです。そのとき、軍は非常に嫌な顔をしました。軍はそんな委員会を作ったところで「われ関せず」という態度をとりました。それでもアウンサンスーチーは国家顧問の権限を使って、コフィー・アナンを委員長とする諮問委員会を作りました。委員会のメンバー9 人は、1 年かけてラカイン州とバングラデシュを調査して回りました。メンバーのうち 3 人は外国人、2 人のムスリムも入っています。ロヒンギャが入っていないということで批判する人がいますが、それはやむを得ない現実だったと言えます。

そして、先ほど紹介があったように、非常に前向きな答申がこの諮問委員会から出ています。これにアウンサンスーチーは責任もって取り組むと国際社会に約束しています。現実には武装勢力による攻撃があり、それの 100 倍ぐらい上回る軍による仕返しが起きています。軍はアウンサンスーチーの考えにそっぽを向き、国防と治安維持に専念しているということで世論から支持を受けようとします。そういう 2 つの壁、すなわち軍の壁と、反ロヒンギャで固まっている世論という 2 つの壁を前にして、アウンサンスーチーは非常に苦しんでいます。国際社会ができることは、彼女を非難することではなくて、彼女が取り組もうとしているコフィー・アナン委員会の答申への取り組みを、しっかりとバックアップすることだと私は考えています。

最後に１つだけ追加で申し上げますと、「仏教」対「イスラム」という形でこの国を見ないほうがいいと思います。ビルマの仏教界は決して一色ではありません。仏教界の中でも、ロヒンギャなんか出ていけというウルトラ排斥派から、もう少し柔らかい姿勢の人までいますし、もっと政治的に言えば、軍を支持する僧侶や少数派の仏教徒と、圧倒的多数のアウンサンスーチー支持の僧侶や国民がいます。その人たちによる仏教界の中の分裂というものがあって、これがまた微妙に軍やアウンサンスーチーに影響を与えています。特にアウンサンスーチーのロヒンギャ問題を克服したいという試みに、ネガティブな影響を与えているといえます。そうした点もぜひ知っておいていただければと思います。あとはパネリスト同士のトークの中で触れたいと思います。どうもありがとうございました。

下澤

根本先生、ありがとうございました。それではプレゼンをしていただいたパネリストの皆さま、そしてモデレーターの藤﨑さん、どうぞ壇上のほうにお上がりください。ここから先は、パネリスト同士の質問や課題・疑問点などを整理しながらお話を進めていきます。会場の皆さまにも質問をいただく時間をぜひ設けたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。それでは藤﨑さん、ここからモデレートをよろしくお願いいたします。

藤﨑文子　**「シンポジウム」**

ありがとうございます。ご紹介にあずかりました、シャプラニール市民による海外協力の会事務局次長の藤﨑と申します。簡単に自己紹介をいたします。シャプラニールという日本の NGO に所属しており、私自身、通算 6 年半バングラデシュに駐在をしていました。シャプラニールはバングラデシュとネパールで活動をしている NGO で、バングラデシュでは 92 年の独立直後から貧困層の支援をしております。今回ネパールに出張中にロヒンギャの問題がどんどん大きくなって様子を見て、現場を自分の目で確認しシャプラニールの支援活動を作ってこようと思いました。9 月の末と 10 月の初めに 2 回現場を訪問しております。それから 2 カ月がたっているので状況も変わっているかと思いますけれども、自分の経験を基にしながら、今回のパネリストの方にお話を伺いたいと思います。

それではヘベカーさん、私はヘベカーさんのお話を伺い、長年ロヒンギャの問題に関わっている方として、プロフェッショナルな立場からだけでなく、一個人としてこの問題に心を痛めておられると感じました。現場に足を運ばれ長い時間を過ごされているのは今回のパネリストの中ではヘベカーさんだけなので、実際にキャンプで特にロヒンギャの人たちとお話をしたり交流する中で、印象に残ったエピソードがありましたら、お聞かせいただけないでしょうか。

Hebecker

To be very honest I still have sleepless nights sometimes, even now weeks after I return from Bangladesh, because some of the stories that I picked up during my work in the field still haunt me. I had seen, in my now more than 24 years working with the UN, many, many bad situations - Darfur IDPs and refugees in Sudan and Chad, Central African Republic refugees in Cameroon, Rwandan refugees in Central African Republic, the Kosovo refugees in Albania, so many situations that always carried the very horrendous stories, but what I heard recently from some of the Rohingya refugees about what happened to them was really horrific. It's difficult to describe. I was also particularly emotional about it because in almost all the stories that I picked up, I had the images of Rakhine State in front of me because I had worked there, so

when, for example, one man told me his story about his village and family, I literally had this village appear in front of my eyes; I had been there several times during my time in Rakhine state. Then he was telling us how the military supported by the Buddhist militia were coming, shooting in the air, not shooting at people, but shooting in the air to scare people, then started burning the houses, so people would run away. And as he grabbed his wife and his sister and his wife's sister with their children to escape, after a few hundred meters they realized that their mom was not with them. And so they looked back, saw the burning house, the security forces and the Rakhine people shooting, they could not go back unless risking their own lives and they had to assume that their mother was being burnt alive in the house.

And so I heard many more stories that day, one more shocking than the other. Two little brothers, 7 and 8 years old who couldn't even really speak for themselves, they only gave very, very brief answers when we asked them what had happened to them. Two very young brothers who had lost both their parents in the violence along with several other relatives and were now being taken care of by an aunty. For the first time in my almost 25 years of working for the UN, when I walked away from them – normally in any refugee situation I would clap them on the shoulder and say everything will be fine – this time, I could not. Because I could not imagine what the future would hold for these kids. So in general and this is just my own story and I didn't spend much time having these interactions with refugees because I had other functions dealing more with strategic planning and coordination but our staff in the field, especially our local Bangladeshi staff had to listen to these stories day in day out, many, many of those, very, very traumatizing experiences for the Rohingya, but also very hard for the staff who are working in those camps that we had to establish counselling for some of them to get these stories out of their heads and be able to sleep at night.

藤﨑

ありがとうございました。それでは大橋さんに質問します。バングラデシュに長くいるビハール難民のことに重ね合わせて、ロヒンギャの人たちの将来を予測されました。ビハールの件で非常に画期的だったのは国籍を与えるという最高裁の判断だと思います。私は 2001 年から 2003 年までバングラデシュにおり、2012 年に駐在でバングラデシュに再び戻っています。シャプラニールのバングラデシュ事務所のすぐそばに、今日映像で出ていたジュネーブキャンプがあります。2003 年から 2012 年の 9 年間に、キャンプの様子が非常に変わったという印象があったのです。建物が増築されて全部上に伸びていたのです。2 階建てどころか 3 階建て、4 階建てのような建物を見て、不思議だなと思っていました。それがこの最高裁の判決が出て、人々の行動変化に現れたんだということが分かりました。質問は、最高裁の判決、この画期的な判決を実現たらしめたバングラデシュの社会、もしくは政治状況が何だったのかということを、もう少し掘り下げてお話しください。

大橋

非常に難しい質問で、私もうまく答えられるかどうか分かりません。ただ世代交代というのがすごく大きかったとは思います。パキスタンのジュネーブキャンプに行くと、私が最初にバングラデシュに行ったのが 1979 年。ビハール難民キャンプに最初に行ったのが何年だか覚えていないのですけれども、当初は、堂々とパキスタンの旗がはためいていて、やっぱりパキスタンに帰るんだという掛け声が非常に強かったわけです。しかし通い詰めているうちに、徐々にその色が薄まりました。やっぱりキャンプで生まれ育ったような人たちの数が大きくなり、その人たちの声が大きくなってきたということが非常に大きい。たぶん最初のうちは、バングラデシュの国籍を認めろという訴訟を起こすこと自身ができなかったんじゃないかという気がしています。やっぱり徐々に周りと打ち解けだしていった。もちろん彼らは今でも自分たちの財産とか、自分たちの権利を要求しているわけですけれども、やっぱりもうバングラデシュに残ったほうがいい、法律だってバングラデシュ生まれの者はバングラデシュの国籍が得られると書いてあるのだから、と考えてそれが実現したのでしょう。

インドもそうですけれども、バングラデシュの裁判所ってある程度独立してリベラルな判決を出す性格があるのかな、とこの時は思いました。司法の独立は危うい場合もあるのですけれども、ある程度そういう独立したことができるんだな、と思いました。
もう一方に、政治的に彼らを投票の支持層として扱おうとした動きももちろんあった、と一般的に言われていますけれども、ここら辺は証明が非常に難しいところです。
いずれにせよこのビハール人のことが、もしかしたらロヒンギャの人にも当てはまるようになるかも知れないと思ったのです。長い時間がたつと、ビハール人がそうだったように、ロヒンギャの人たちもいずれそうなる可能性が高い。でももしその一部がすごくラディカルになってしまうと、差別や排外の対象になってしまう危険性もある。このままでいくと、ちょっとずつ吸収されていくような雰囲気が本人たちの中にも出てくるし、社会的にも出てくるのではないかと予想します。これは、バングラデシュのいい面でもあると思います。

藤﨑
ありがとうございます。私がバングラデシュに行っていたときに、ある日の新聞にビハールの人たちが今どんな状況に置かれているかということを特集した号がありました。偶然ですが、この号の裏面にロヒンギャの人たちを報告した記事がありました。大変象徴的というか、偶然とは思えない印象を受けました。ありがとうございます。
それでは加藤さん、日本の無国籍の人たちのご支援をされているということなんですけれども、無国籍と難民状態は必ずしもイコールではないということは分かりましたが、私が非常に基本的なところで分からないのが、今回ロヒンギャの人たちが支援を受けるに当たって壁となるのが、バングラデシュ政府が難民条約に加盟していないからということが出てきます。難民条約に加盟をする、しないということで、いわゆる難民状態に置かれている人たちにとってどのような差があるのか、簡単で結構なので教えていただけたら。お願いします。

NEW AGE Xtra
Friday, October 6, 2017, Ashwin 21, 1424 BS
Aliens of the land!
Shaikha Shahada Panseree spends a day in the Bihari camp of Mohammadpur

加藤
ご質問ありがとうございます。難民条約第 1 条を見ますと、人種・宗教・国籍・政治的信条・特定の社会的集団の構成員に関わり、その国にいると迫害がある、あるいは迫害の恐れがある方を救済していく条約です。少なくともしバングラデシュが難民条約に入っていれば、当然難民の審査をしなければいけないです。ノン・ルーフルマンの原則が適用され、簡単に彼らの母国に送還できないということがあるのではないかと思います。また、難民条約は、不法入国しているということで、難民の審査を受けている人間に対して、処罰はしてはいけないということが言われているので、不法に入国せざるを得ないロヒンギャの状況を改善していくには、条約に入っている、入っていないというところは非常に大きい影響があるのかと理解をしております。

藤﨑
ありがとうございます。もしヘベカーさん、何か付け加えることがあれば。

Hebecker
The High Commissioner was asked a very similar question when he visited Bangladesh, because at that time, there was controversy in the Bangladeshi Government about the terminology, whether to even call them refugees. And when he was asked by the Bangladeshi media what he thought about the Bangladeshi Government not calling the Rohingya refugees,

when the UN and the international community had come to unanimous conclusion that this is a textbook refugee situation. He (the High Commissioner) said it didn't really matter what the government calls them. We all know, we've all seen there's evidence of what happened that forced them to cross an international border.

So subsequently a few weeks later, Bangladesh actually decreed in a circular saying it had decided refer to these people as 'forcibly displaced Myanmar nationals'. So if you decipher this terminology, it's basically cryptic for refugees, because forcibly displaced means you are refugee, depending on the reasons, and the reasons for their forced displacement were very clear. The reason why Bangladesh chose not to call them refugees is that they wanted the terminology to reflect their Myanmar origin, the link to Myanmar, to insist that these people actually belong to Myanmar. But your answer was also very correct.

藤﨑

ありがとうございます。根本先生、ミャンマーに造形が深い方の発表を聞いて非常に勉強になりました。コフィー・アナン氏と支援に基づく国際支援が大切だと書かれております。本当に必要なことだと思うんですが、それが難しい現状で、ブレークスルーがあるとすればどの辺りだとお考えでしょうか。

根本

大変難しい問題ではあるんですけれども、基本認識としては、現在のミャンマー連邦共和国の体制が、軍が半分、市民が半分という支配体制になっていると。市民のコントロールが及ぶ部分が全体の半分程度、残り半分は軍だと。特に軍はまず軍そのものをコントロールしますし、警察をコントロールしていますし、国境問題も全部コントロールしていて、そこに市民のコントロールのリーダーであるアウンサンスーチー国家顧問の入る余地がないんです。そういう憲法を変えたくても変えられない現状がある。軍がかたくなに憲法の改正を拒否している。そういう中で模索するしかない。国家顧問としては模索するしかない。そして世論が反ロヒンギャです。そういう中で国際社会は具体的に何ができるかというと、まず軍の説得だろうと思います。これはいろいろなルートを通じて働きかけることができると思うんですが、ただ軍は非常にかたくなですから、働きかけてすぐに軟化するということではないと私は見ています。

もう一つは、アウンサンスーチー国家顧問がコフィー・アナン委員会の答申を、国内の世論に向けて、国民に向けて説明をするとき、国際社会のバックアップがあるんだということを示すということでしょうか。ただこれも実は非常に微妙な問題でして、今、ミャンマー国内の国民は、アウンサンスーチーへの支持をより一層強めています。しかしそれはねじれた支持でありまして、国際社会がアウンサンスーチーを非難し、ノーベル平和賞を取り上げろとか、いろんなヨーロッパやアメリカの町や地域が出した賞を取り上げろとかいうのが起きていて、我らがスーチーさんをいじめていると、国際社会はけしからんと。私たちは私たちのスーチーさんを守るぞという心理で、アウンサンスーチー国家顧問への支持を強めている。これはアウンサンスーチーから見れば、決して好ましい現象ではないんです。もし現状でコフィー・アナン答申を国民に説明し、これを受け入れますと言ったら、国民のスーチーへの思いは非常に難しい、すなわち微妙な形になりかねない。そこをどういうふうに乗り越えられるか。もし国際社会がコフィー・アナン答申支持、アウンサンスーチー頑張れと言ったときに、可能性としてあるのは、ミャンマーの世論のほうが、アウンサンスーチーをいじめてきた国際世論のほうにアウンサンスーチーが乗ってしまったと受け止めて、国際社会とアウンサンスーチーは一体化していて、もはやミャンマーの敵であると短絡的に考える可能性もなきにしもあらずで、非常に難しいんです。非常に微妙なんです。しかし、アウンサンスーチー国家顧問が、コフィー・アナン答申に取り組みますと強く国際社会に約束した以上、国際社会としてはそれが実際に行われるようにバックアップする。バックアップの方法についてしっかりとアウンサンスーチーと話し合って、作戦を練る必要があるんではないかと私は見ています。以上です。

藤﨑
　ありがとうございました。それでは今度は会場のほうから質問を受け付けたいと思います。ご質問は短めに。

質問者１
　本日は有意義なお話ありがとうございました。弁護士の質問者１と申します。質問を２つに絞ってお伺いします。加藤先生と根本先生にご質問いたします。加藤先生に対してですけれども、日本にいるロヒンギャ難民の方が抱えている問題点としまして、いろいろ問題はあるんだと思いますけれども、特に医療の問題や教育の問題、就労の問題とある中で、先生がお感じになる特にこれが一番厳しいという問題がおありでしたらご回答をお願いいたします。
　根本先生にご質問なんですけれども、先ほどロヒンギャに対する不法移民という意識が強いということで非常に驚いた。驚いたばかりで思い付いた質問で恐縮なんですが、例えば日本人がミャンマーに行って住みたいというようなことであったとしても、それはある意味新しく来た、土着民族ではないということで、排除の可能性もあるというか、危険性があるという理解でよろしいのか、またそこは違った問題が出てくるのかといったことでご質問いたします。よろしくお願いします。

藤﨑
　ありがとうございます。先に続けてご質問を受け付けたいと思います。

質問者２
　開発コンサルタントをしています質問者２といいます。ダーク（登壇者）をはじめ、コックスバザールで活動をしている多くの友人にはまず敬意を表したいと思います。現在来ている難民の中でunaccompanied minor（親に連れられてきていない子ども）、女性だけであるとか、それらの人口、比率はどれぐらいか、アイデアがあれば教えていただけますでしょうか。またその中で、その人たちに対してUNHCRが最重要で活動している内容、ホストコミュニティが何かしているのであるか、難民のレジリエンス（抵抗力）というお話がありましたけれども、難民の中で迫害をしてきた相手たちに対して何かアクションが起こされているのか、教えていただけますでしょうか。よろしくお願いします。

藤﨑
　ありがとうございます。今のご質問ではヘベカー氏宛ての質問ということでよろしいですか。

質問者２
　そうです。

藤﨑
　ありがとうございます。

質問者３
　医師の質問者３と申します。ミャンマーでずっと活動しておりまして、元々国境なき医師団で働いたこともございました。質問は２つでございまして、ダークさんと根本先生、もし可能だったら大橋先生なんですけれども。１つ目は、宗教がイスラムだからということで排斥しているわけではないと。ただやはりスーチーなり軍政なりというのは、大多数のマジョリティである仏教徒のバックアップなり、こういった政治的な動きをいつも求めております。
　そんな中でどうにかこの宗教を動かす、例えば門司にあるパ

タの今の館長はラカイン族の坊主です。こうした方を説得する。日本にせっかくいるんだから説得して、どうにか影響を与える。ミャンマーの中では大変有名な坊さんなので、こうした方を説得するなりで、宗教的にいろいろ影響を与えることができないものかというのが 1 つ。
もう一つ、これはダークさんにつながるんですけれども、今 UNHCR なりさまざまな NGO があの地域からキックアウトされて、もう二度と戻ることはなかなか難しいでしょう。ただスーチーさん的には、そういったコフィー・アナンさんの指針もあることですから、どうにか外国人だったり外国の NGO を入れていきたい。ただ high profile、要するに有名なところになってしまうとまたターゲットになっていくというのか、キックアウトされるターゲットになっていく。こうした微妙なところをどうにかすり抜けていく方法がないのでしょうかというのが、根本先生とダークさんと重なる質問にもなってくるんですけれどもそこが 1 つ。
3 つ目は大橋先生とたぶんダークさんになってくるんじゃないでしょうか。バングラの中で産業がどんどん発展していけば、ある程度の吸収力になっていくということ。同じことはミャンマーの国境地帯、シットウェなりモンドーの辺が発達していくことで、ロヒンギャで出ていっちゃった連中を戻していく力になっていくのかどうか。なっていくと思われるでしょうか。この 3 点でございます。どうもすみません。

藤﨑
最初の質問は根本さん宛てでよろしいですね。

質問者 4
質問者 4 と申します。ヘベカーさんにお願いをしたいんですが、今日、大橋先生からビハール難民のケースを使って、避難先のバングラデシュでの定住の可能性ということが出ましたけれども、現在の状況でそれをロヒンギャ難民のケースに当てはめた場合、そういった方向性を打ち出すことがロヒンギャ難民の人たちに対する、まだミャンマー側にとどまっているロヒンギャの人たちに対する迫害を、さらに助長する事態をもたらすリスクはないのかということ。あるいはそういったことをどう考えますかという質問、これが 1 つです。
もう一つは、12 月 5 日の第 1 回目のセッションのときに、武力紛争下の性暴力のことが話題になりました。これに対してどういうふうに取り組んでいくかということに関して、国連であれば国連決議の 1325 というのが武力紛争下における性暴力も含めて、gender の問題、武力紛争地における gender の問題というのを取り扱っていますけれども、そういった枠組みも含めてコフィー・アナン答申というものはそういったことにも触れて、今後そういった問題をどういうふうに取り扱っていくべきだというふうな recommendation というものを含まれているんでしょうか。もし含まれているであれば、概略で結構ですので教えていただければ助かります。以上です。

藤﨑
ありがとうございます。それでは最初の質問のほうからいきたいと思います。まず加藤さんに、日本のロヒンギャの人たちが直面する問題がさまざまある中で、大変なのはどんな点でしょうかというご質問でした。

加藤
ご質問いただきましてありがとうございました。難民認定制度自体よく今ニュースで耳にすることが多いと思うのですが、非常に認定率が低いということがまず 1 つあると思います。玉石混交で偽装難民がいるということを報道している機関もありますが、そういった中で仮放免のロヒンギャの方が何名かいます。そうすると働くことができないわけですよね。しかし働かないでどうやって食べていくのだ。かといって国に帰れるわけでもないという中で、働くことさえ許可されれば、おそらく解決をしていく問題というのはたくさんあるのではないかと感じています。
もう一つは、難民申請中で 6 カ月の「特定活動」の在留資格を更新している方もいると思います

が、それも「偽装難民」のあおりを受けて、いつ就労許可が切られるのか、いつ難民認定されるのか、在留許可が出るのか、そういった長期的な展望がなかなか描けない中で、子どもをどう育てていく、次どのようにしていくという生活のプラン自体を作っていくことができない。そのこと自体が私は問題ではないかなと考えています。以上です。

藤﨑
ありがとうございます。では根本先生に、ミャンマーの人たちに不法移民に対する差別的な感覚があるようですが、日本人が行った場合に、同じような反応があるのかというご質問です。いかがでしょうか。

根本
大変面白い質問で驚きました。日本人がミャンマーに行って国籍をくれと言ったらどうなるかということですよね。これは帰化申請という道があります。帰化申請で審査が通れば、例え元の国籍が日本であってもミャンマーの帰化国民になることができます。帰化国民が 3 世代たちますと正規の国民にランクアップできますが、帰化国民は実質的にさまざまな権利が制限されていますから、135 の民族が自動的に持っている正規国籍とは差がつくということです。したがいまして、ロヒンギャも帰化申請すれば通る可能性は非常に高いんです。しかし、帰化申請するときの条件があって、帰化申請をする以上、あなたは外国人ですよねという質問がまずあるわけです。いえ、私はロヒンギャです。古くからラカインに住んでいますと言ったら最後、出ていけになるわけです。ロヒンギャという民族はいない。いるのにいないんです。ロヒンギャを主張する限り、目の前にロヒンギャの人間がいてもいないとされるわけです。ですからロヒンギャという名前を捨てて、はい、ベンガルからの不法移民でございます。帰るところがないのでどうか置いてください、帰化させてくださいとなれば、心優しい仏教徒の多いミャンマーですから、ちょっと皮肉を込めて言えばそういうことですから、帰化は許可される可能性は非常に高い。ロヒンギャ排斥の立場に立つ人たちもそのくらいのことは考えていて、ロヒンギャという名前を使うことへの憎しみ、敵意、排斥が一番強いとお考えください。したがって、もし日本人が日本民族としてミャンマー国籍をくれと言ったら、一発でアウトになると思います。

藤﨑
ありがとうございます。それではヘベカーさんへのご質問です。保護者を伴わず子どもたちだけで逃れて来ている人たち、女性の割合はどんな感じなのか、UNHCR からどのようなサポートをしているか、ホストコミュニティへの対応とレジリエンスに対する質問もありました。回答していただけますでしょうか。

Hebecker
I don’t have very much information. If I had known about the question, I would have brought some, but on the unaccompanied and separated children as we call them in UNHCR, I can say there were about 30,000 to 35,000 in total at the time when I was there in October 2017. That’s a very high percentage if you look at the total number of the new arrivals. And obviously the number is too high for any one agency to deal with. Many of these children are actually in the care of adults to whom these children relate. That could be relatives or distant relatives or it could be just adults from the same village and sometimes random caretakers who picked them up during the escape. There are local Bangladeshis who take care of many of the children. Unfortunately, though normally these caretaker arrangements are fine, there are also reports of some wealthy Bangladeshis, especially in the Teknaf area who out of a generous humanitarian gesture invite 50-60 of these children who are then behind high fences without any access of any authorities or any childcare agencies to know whether these children are treated properly. Often these children might actually end up being exploited. There were many reports of

children who were not in proper care arrangements being exploited by the Rohingya refugees themselves, sending them to collect firewood or work in exploitative arrangements. Many of those children of course falling prey to human traffickers and many other criminal activities, especially the girls.

So yes and no, there is a big problem there. The government is aware. In fact it was good to see that it is not just the UN and the international NGOs taking care of these issues but the Bangladeshi Ministry for Women and Children also sent a high-level delegation for an assessment and come up with recommendations. There is a working group that deals with this and coordinates the response to the issue. The identification of these children is very important, which is almost complete, because UNHCR finished a first headcount which didn't go too much into detail on all the personal details but it captured the vulnerabilities for each registered refugee family. And if children were identified that didn't have their physical, biological parents with them, they were entered into a database and so they can be traced and assisted with special measures.

Single female headed households was the second question or the second part. I think one of the mysteries about this refugee population is that a much larger portion, I can't exactly say how many, but I think about 40% of all households, are female-headed, which is much higher than in an average refugee context. It is always there because many men stay behind to fight or protect their property or men were killed during the violence. In general, in most refugee situations you have more women than men and more female-headed households. But there is still not enough evidence on where all these men are.

藤﨑

次の質問は、仏教徒から絶大な支持を受けている日本のビルマ寺のお坊さんなどを使ってミャンマー世論を動かしていくことができないのかというご質問です。これは根本さんにお答えいただくのがいいかと思います。

根本

ヤンゴンでも宗教間対話はやっています。僧侶、ムスリムの指導者、イスラム教の指導者、キリスト教の神父さんや牧師さん、ヒンドゥー教徒の指導者、そういった人たちが 1 カ所に集まって、どういう質問をしてもいいという会合は NGO がやっています。また世界宗教者会議などで海外で会合が行われますと、ビルマの、ミャンマーのイスラムの指導者とキリスト教の指導者と仏教の偉い僧侶が、そこで同席するということが見られます。ですから宗教対話がなされていないわけではなく、なされています。したがって門司の有名なパゴタの有名なお坊さんにお願いすれば、喜んで協力はするとは思うんですが、あくまでもイスラムと仲良くしましょうというレベルで終わると思うんです。もしロヒンギャのロヒンというひと言でも言ったら、門司のパゴタの僧侶も顔を真っ赤にすると私は確信します。ラカインのお坊さんであればなおさらです。ラカイン人の方々はロヒンギャを一切認めない。不法移民としてしか見ていませんから、ロヒンギャとの交流、ロヒンギャへの偏見をなくす方向でミャンマーの国民を説得してくださいませんか、お坊さまということは幾ら言っても、おそらくというか、ほぼ確実に、それはできない、それはあなたの考えが間違っていると逆に食ってかかられると思います。ロヒンギャはいないんだということで、お坊さんが私たちを説得しようとする。私は何度もその現場を見てきましたので、おそらく門司のパゴタのお坊さまでもそういう対応をなさるのではないかと思います。

藤﨑

ありがとうございます。それから、2 つ目の質問が、Northern Rahkuing State から主要な国連機関や大手 NGO が追い出されている状況の中で、すり抜ける方法はないでしょうかという質問でした。

Hebecker

First of all, it's not entirely correct that they were all kicked out. We are not able to operate in Rakhine State as before but as I was saying earlier, UNHCR is actually present, so is the World Food Program, but no agency is currently able to operate in Rakhine State. We are confined to the compounds but not been officially 'banned' from Rakhine State, so there is at least hope that, after some more stabilization of the situation and when the violence has stopped, international organizations will be allowed to operate again normally. It will happen, I am quite sure. The Myanmar authorities could have actually physically taken out all the international representatives even at an earlier stage just for security reasons, but they didn't. They didn't and they will not do it now. The recommendations of the Annan report are very clear with regards to the need for an international presence. It's actually a separate heading in the report and I think that will be in favor of the Myanmar authorities to give legitimacy to anything they will do there, even when they do things that are not entirely in line with what the international community would want to see there.

藤﨑

ありがとうございます。ヘベカーさんに、引き続きお答え願います。

Hebecker

I can actually combine maybe both questions. There was another question or comment earlier on the history of the Biharis becoming citizens of Bangladesh and whether that would not also work in Rakhine State for the Rohingya when development picks up and they need labor to do construction and infrastructure projects and so on. So I think, both ideas – including Rohingya being admitted into Bangladeshi citizenship if they can't return to Rakhine – are actually thinkable. In fact I was very grateful to hear this suggestion. I have been thinking a lot about this, also looking for possible solutions suggested by history – such as the Palestinians or from East Timor, or the ethnic minorities in Kosovo (mainly Serbs) etc.. So anything that academia, historians and others can propose as solutions, we will have to try all of that. I doubt, that it will be politically easy also because of the number of people. We are talking about almost 1 million Rohingya now in Bangladesh. It will be very hard for both sides to make decisions for the Rohingya and admit them into full citizenship. For Myanmar it will be difficult and for Bangladesh it would also be difficult. As I had said earlier, the solution for the Rohingya should be where the problem was – in Myanmar.

藤﨑

ありがとうございます。最後の質問の方で、ロヒンギャの人たちをビハール難民のような状態に立たせることで、ミャンマー側での迫害をさらに強めるリスクはないのかということ、性暴力についてどう取り組んでいくかという 2 点ありました。それも一緒に最後合わせてご回答いただけますでしょうか。

Hebecker

Well, the key question for all of this, I think, is development that will enable these two countries that are both poor, to reach a level of development that will allow more equitable distribution of public wealth. Anything short of that will always carry risks – it is only recently in India that India is finally starting to confront the issue of lower class (casts) because India has now reached a certain level of development. The middle-class of India will be wealthier by 2030 than the middle-class in the United States. So this will happen when development picks up in Bangladesh and in Myanmar and probably Rakhine State. Rakhine State may not be the first candidate for wealth picking up in Myanmar because it is one of the poorest regions of the country. I have only seen Chin State, which I think is poorer than Rakhine State, and it's also

landlocked and has other problems. I think the key to this really is development. There was another question about sexual violence in conflict and whether the Kofi Annan report refers to the issue of sexual and gender-based violence. I don't think so. I tried to quickly check in my copy of the report. I don't recall any specific mention. I tried to quickly think why there is nothing, probably because it is not the key subject of what Kofi Annan was tasked to do. They were tasked to review the situation in Rakhine after the October 2016 events. So it had nothing to do with what occurred now. And sexual and gender-based violence was not a central issue for that analysis. I might be wrong on this; in fact I encourage the students to maybe make that a research topic and to look into sexual and gender-based violence in Kofi Annan's analysis.

Well, it is not a secret that sexual and gender-based violence is a huge issue in the Rohingya community. It has always been. There is of course the very low social status and role of women in the Rohingya community. The women are not normally allowed to go out, they are supposed to cover themselves when they do, but normally they are just confined to their houses. In the refugee camps it's pretty much the same. There is a lot of empowerment projects going on, we're trying to organize the women into small communities and self-help groups, especially those women that are without men, because they still fall under the same religious restrictions, not to go out by themselves without a male relative. But if they have no adult male relative, they can't move. So for them it is particularly hard to survive. So the UN, not just UNHCR but in fact also UN Women, a relatively newly established UN agency, is also present there to work specifically on women's empowerment. There is UNFPA who work on sexual health, reproductive health; a lot of other agencies that are working on the issue. But we have big concerns. A lot needs to be done on prevention, on identification of cases that already occurred, access to justice and bringing people who did something wrong to answer for their crimes.

大橋

たぶん私に質問があったのは、バングラデシュで産業発展で労働力で吸収されるかということです。今ははっきりもちろん言えないのですけれども、たぶん国際的な基準とか日本的な感覚でいうと人権状況ひどい状態だけれども、労働力として使われていく可能性は十分あると思います。だけれども、日本だって技能実習生は今までひどい状態に置かれてきているわけですから、それでバングラデシュが悪いとはなかなか言えないのだろうと私は思います。バングラデシュ人も、繰り返して言われるように、それなりの道義心があるし、あまりひどい状態だと周りからも非難される。一般的な水準から見ればロヒンギャの労働者たちはひどい状態に置かれる可能性はあるけれども、それでも自分で働いて食っていくことになる。それはビハールの人たちも、他の人たちがあまり就きたがらない仕事、隙間産業に入っていってどうにか食いつないできているわけです。たぶんそれに似たような状態が生まれて、それがいろいろスイングしてだんだん少しずつ良くなっていくのではないかと思っています。それの是非は、また別ですが。

藤﨑

それでは下澤さんのほうにお返ししたいと思います。

下澤

パネリストの皆さん、藤﨑さん、本当にありがとうございます。まだクリアになっていない面がたくさんあるものの、報道、メディア等から見た単純化された問題の見方から、より多角的な視点とか、特にミャンマー側の文脈をどう理解するかが非常に重要だったということを痛感いたしました。本当にありがとうございます。終了に当たりまして、閉会のあいさつを、グローバル共生研究所の所長の大橋正明さんからお願いしたいと思います。

大橋

2 日間にわたってこんなにたくさんの方が来てくださったことを、大変心から感謝を申し上げま

す。今日申し込みがあっただけでも、昼の時点で 250 名の方がありましたので、それ以降の申し込みの方が増えていかなりの方に来ていただいたことになります。ありがとうございました。
それは逆に言うと、この問題に対する興味、関心が高いということと、他にあまり情報が出てくるところがないということだと思います。今、下澤さんが言ってくれたように、私たちはいろんなバランスのとれた多角的にものの見ていかないといけない。一方的にこうだということになるのもあまり生産的ではない、と思っています。
　この研究所としては、この避難民の研究プロジェクトを立ち上げていますので、今回と前回で話をしたメンバーがそのプロジェクトのメンバーですので、この問題はしばらく続くと思っています。
　また今後何らかの形でこういうふうに皆さんにお知らせして、この問題を多角的に考える、メディアが伝えるようなものではなくて、もっと深い角度から考えるようなことを、多角的に考えることを継続してやっていきたいと思っております。また皆さんのご参加をいただくことによって、それを進めることにつながっていきます。ぜひまたお目にかかれることがあると、いいなと思っています。
　こんな研究所がそんなことをやらなくたって、ロヒンギャの人たちがちゃんとした生活を送れるようになるのが、本当は一番いいわけです。しかしなかなかそうはならないので、また皆さんとお会いすることになってしまうと思います。本当に今日はありがとうございました。気を付けてお帰りくださいませ。

下澤
　それではパネリストの方に再度拍手をお願いいたします。藤﨑さんもどうもありがとうございました。以上をもちまして全てのプログラムを終了いたします。お気を付けてお帰りください。

ロヒンギャ難民に関する連続緊急シンポジウム
報告書

2018 年 3 月発行

発行・編集　聖心女子大学グローバル共生研究所
代表者　大橋正明

〒150-0012
東京都渋谷区広尾 4-2-24
聖心女子大学 4 号館／聖心グローバルプラザ
TEL　03-3407-5811（代）
E-mail　kyosei@u-sacred-heart.ac.jp
URL　http://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp
※　無断転載はご遠慮ください